

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始



E708
N48
(12)



法隆寺大鏡

第十二



圖版 二九	御物	伎樂面(其二十六)
同 三〇	同	同 (其二十七)
同 三一	同	同 (其二十八)
同 三二	同	同 (其二十九正面)
同 三三	同	同 (同 側面)
同 三四	同	還城樂面
同 三五	同	羯鼓(正面)
同 三六	同	同 (側面)
同 三七	同	羯鼓刷(全形)
同 三八	同	羯鼓刷(全形)
同 三九	同	同 (部分)
同 四〇	同	羯鼓刷
同 四一	同	羯鼓臺(正面 側面 表面)
同 四二	同	鶴樓刷
同 四三	同	漢竹尺八
同 四四	同	開元琴(表面 側面 裏面)

圖版 四五	御物	琴柱
同 四六	同	合子
同 四七	同	香木經筒(全形)
同 四八	同	同 (身)
同 四九	同	同 (蓋)
同 五〇	同	泥繪漆箱(蓋正面)
同 五一	同	同 (同 側面四方)
同 五二	同	宮(二部)
同 五三	同	蓬萊山蒔繪製裝宮蓋(表面)
同 五四	同	同 (裏面)
同 五五	同	片輪車蒔繪手宮(全形)
同 五六	同	同 (五部)
同 五七	同	千鳥蒔繪文臺
同 五八	同	黑漆螺鈿鳳紋唐櫃(側面+上手)
同 五九	同	同 (同 一手)
同 六〇	同	同 (蓋表面)

圖版 六一	同	黑漆螺鈿鳳紋唐櫃(裏文樣)
同 六二	同	同 (同 部分)
同 六三	同	寄木手宮(側面)
同 六四	同	同 (同)
同 六五	同	同 (同)
同 六六	同	同 (同)
同 六七	同	厨子(正面)
同 六八	同	同 (同 側面)
同 六九	同	同 (上面)
同 七〇	同	石名取玉
同 七一	同	八咫瓢(蓋表)
同 七二	同	同 (側面)
同 七三	同	同 (同)
同 七四	同	同 (同)
同 七五	同	青磁臺
同 七六	同	蟹輪摺型

圖版 七七	御物	輿筋
同 七八	同	高燈臺
同 七九	同	玩具甲冑
同 八〇	同	劍(其二)
同 八一	同	同(其三)
同 八二	同	梓引 胡蝶 鎗箭 箭 利箭
同 八三	同	壺籠
同 八四	同	聖德太子御舄
同 八五	同	甕(全形)
同 八六	同	同(部分)
同 八七	同	龍鬘篋
同 八八	同	疊四枚(全形)
同 八九	同	同 (部分)
同 九〇	同	工匠具
同 九一	同	同
同 九二	同	大升及升

南都十大寺大鏡
第十二輯 法隆寺大鏡第十二册解説

御物 伎樂面

一、二	其一	正面 側面	木造	縦 一尺二分 横 七寸三分
三	其二		木造	縦 九寸三分
四	其三		木造	原寸大
五、六	其四	正面 側面	木造	縦 九寸五分 横 七寸五分
七	其五		夾紵漆	原寸
八	其六		木造	縦 一尺二分
九	其七		木造	縦 八寸八分
一〇、一一	其八	正面 側面	木造	縦 一尺四寸 横 八寸
一二	其九		木造	縦 一尺二寸五分
一三	其十		木造	縦 一尺三寸六分 横 七寸六分
一四	其十一		木造	縦 九寸六分 横 七寸五分
一五	其十二		木造	縦 九寸五分 横 六寸五分
一六	其十三		木造	縦 一尺 横 七寸五分
一七	其十四		木造	縦 九寸五分 横 七寸二分

一八	其十五		木造	縦 一尺 横 七寸
一九	其十六		木造	縦 一尺八分 横 六寸五分
二〇	其十七		木造	縦 九寸 横 六寸三分
二一	其十八		木造	縦 一尺二寸五分 横 八寸六分
二二	其十九		木造	縦 九寸五分 横 七寸三分
二三	其二十		木造	縦 一尺五分 横 七寸三分
二四	其廿一		木造	縦 一尺一寸 横 六寸五分
二五	其廿二		木造	縦 一尺二分 横 七寸
二六	其廿三		木造	縦 一尺五寸 横 六寸五分
二七	其廿四		木造	縦 九寸五分 横 七寸
二八	其廿五		木造	縦 一尺 横 六寸五分
二九	其廿六		木造	縦 九寸五分 横 五寸五分
三〇	其廿七		木造	縦 七寸五分 横 五寸五分
三一	其廿八		夾紵漆	縦 一尺五寸 横 八寸
三二、三三	其廿九	正面 側面	木造	縦 九寸五分 横 七寸

伎樂面が舞樂面と同じく奈良朝に行はれしは普く人の知るところなり。これ等の面また當時所用のものなるべし。伎樂面の名は今日に知られたるもの數あれども、その形と附隨して一々何れと知

るに由なし。こゝに掲げたるも天平資財帳には伎樂面壹拾壹具と

して面の名を擧ぐれども、その形を説かざるをもつてその名を區別

すること能はず。今はたゞその伎樂面たるを知るに止まるのみ。

假面は佛像彫刻と異り寧ろ廣義の表情を有すれど、そのまた編束

せられざる伎巧の自由を存す。これ等の面の如き面として餘りに

寫實的ならざる用意の見ゆるは、象徴的の意味を寓すると共に、また

古代的の神祕主義の潜めるを徴すべし。

これ等の内共十二のものは半製品にて素地の儘なれば却つて刀

法の妙味を窺ふに便なるあり。且又これに作者の樂書と覺しく墨

にて女の顔面を畫けり。又第十三より第廿八までのものは寺傳百

濟國味摩の將來と爲せりと雖も、何れも他と同様に我が國の製作と

見るべきものなり。

又第廿九の面は古來追儂會の毘沙門天面として知られたるもの

なり。往時寺後の山上にて偶然發見せられしを以て、天降り面とし

て傳へらる。その様式は顔面のみならず頭をも差入れて被るべき

形なれば伎樂面と同一なりと謂ふべく、その眼達立ち、鼻梁額と直ち

に相通じて鋭く降されるも亦伎樂面と其の趣を同うすとせざるを

得ず。著色今剥落して原色を明らかにし難く、その前立裝飾は銅鍍

金なり。この金物の文様よりするも奈良朝も早き頃のものとたるこ

と疑ふべからず。とにかくその名を斷言すること能はずと雖も、夙

に本寺に傳存せられ、毘沙門天面の名を以て使用し來りしものにし

て、その様式と特徴に伎樂面たるを現はしながら、同面中に在りて最

も端嚴なる神將の像を存するものと云つて可なり。

二

三四 御物 還城樂面

木彫 漆塗
高一尺 横 七寸五分

總體朱根來塗にて眉及び裏面に黒漆を施し、眼及び齒には金銅を

張り、而して角及び牙は後補なり。裏面に朱漆にて源信氏永仁四年

七月七日と記したり。

三五、三六 御物 羯 鼓

石製 正側面
高九寸 長一尺二寸 闊二尺四分

羯鼓の稱もと外夷戎羯の鼓なるに基づく。その音太廣を主とし、

焦殺促急の調に長すと云ふ。唐代大燕會に十部の伎を庭に設くる

を例とし、中について羯鼓を用ひるは第六龜鼓伎と第八疏勒伎とな

り。龜鼓疏勒皆西方の外夷戎羯の境たり。その樂にこの器の使用

せらるゝ當然なるを知るべし。玄宗これを好みその伎に長ぜしと

傳ふ。唐代伎樂の我國に傳存せられたるは證據の事實多々なりと

雖も、かゝる古器の遺存はまたこれを確實にするのみならず、彼に絶

えたるを我に於いて明らかにすべき無二の遺寶と稱すべきなり。

以慶玄法印舍利供養軒足未進張之訖

とあり。文に明らかなる如く、元と本寺に使用せしもの歳久うして

用を爲さず、事ある毎に他寺より借用し來りしが延文二年六月その

軒足を得て、乃ち藥師寺所用のものに依りて、筆樂吹の役僧賴盛宗禪

房に命じてこれを模造せしめ、聖靈會の節使用の料に充てたるなり。

體觀圖にも明らかなるが如く極めて古雅にして、桐に漆の素塗は更

に撲茂の觀を興へ、延文頃の製作として粗略に過ぐるかの疑あれど

も、即ちこれ銘文に藥師寺墨筒寫と稱せる所以にして、墨筒の稱呼は

この粗模の製に對して始めてその意味を釋然たらしむるなり。藥

師寺の原器は思ふにこれ草創當時を下らざるものにして、その器今

存せずと雖も、これを以てその古様を徵するに餘りあるべし。この

器に銘文なからしめばその出自を釋ぬるに由なく、人をして草卒に

看過せしめて已まんも、幸にその詳細を墨書して傳ふるあり。古模

の器殊に千古の遺韻を藏するの感を深うすること多しとなす。

四一 御物 羯 鼓 臺

正側面 側面
高八寸四分 闊九寸
前高 一尺三寸四分五分 横 九寸

表面朱漆塗、内面漆塗、盤上兩處に窪みを造り以て鼓を安んずるの

用とす。

四二 御物 鷄 樓 窟

高 六寸九分 闊 七寸二分

古樂器の始ど散流せる間に在りて、破れたりとは云へ鷄樓の古容

三

三七 御物 羯 鼓 窟 全形

全形 部分

木造 著色
小 高一尺二寸七分 横 六寸四分
大 高一尺四寸四分 横 九寸七分

形小なるはその材、形大なるはその材杉にして、共に彩色既に剥

落して鮮明ならずと雖も、暈網に彩られたる寶相華葉雲の尙ほ勞髣

として釋ぬべきあり。小には鷄東院三、大には鷄東院二と内側に墨

書あり。思ふに奈良朝時代東院復興の際に造られしものか。裝す

る所の鍍金金具の毛彫の精妙なるもまた當時を語るもの無きにあ

らず。

四〇 御物 羯 鼓 窟

高一尺四寸三分 日徑六寸二分

材は桐素地に漆を塗る。上下の空洞内に墨書の文あり。一方の

文には、

法隆寺 聖靈會暫 三鼓也 聖靈會
願主 一前少僧都實禪 作者 賴盛宗禪房 日安 廿六
又他の一方には

當寺古三鼓雖在之不鳴之間每度大會之時自他併借用非
無効勞之處今度時尅令然而出來之條併冥助之至誠喜悅
喜悅但寺用之外概不可出于他所者也延文二年丙六月日注之

を存するは千古の遺音に接するの感あり。往古の名刹皆樂舞を有したりしは遺存する資財帳の樂器諸道具を登錄せざる無きに徴すべく、寶龜十一年十二月の西大寺記帳に懸樓一面口金懸納黃繩袈裟一口など見ゆるに由ればこの器全く素地を現はせりと雖も亦この種の繪を以て飾られたる昔を憶ふべからざるにあらず。材は桐にして古記に傳ふる所と異なるなるべし。年紀固より推すべからざるも、奈良朝時代を降らざるはまた疑を容るべからず。

四三 御物 漢竹尺 八

長一尺四寸五分五釐

古今日録抄に云ふ次尺八漢竹也太子此笛自法隆寺天王寺へ御之道推坂ニシテ蘇莫者樂吹給之時山神御笛ニ日出御後ニシテ舞ケラ太子奇見返受山給奉見指指出吾其舞舞傳天王寺舞之今云蘇莫者也。天平勝寶八歳の東大寺獻物帖には玉尺八一管尺八一管、釋羅尺八一管、尺八一管と見ゆ。その他西大寺資財帳源氏物語等皆その名を録するを見れば夙に吹奏愛敬せられたるを知るべし。就中その最古の遺品としては御府の藏を推さざるを得ざるなり。その長さは曲尺の一尺四寸有餘にして即ち唐代の小尺一尺八寸に相當す。所謂長笛よりは短きを以て短笛とも稱せられ、又尺八の稱ある所以なり。

四四 御物 開元琴

長三尺六寸二分

黒漆七絃の琴なり。千歳の齡は寄る年波に似たる斷紋の上に現

はれ奏でざるに融和中正の古音耳に響くの感あり。龍池に墨書して開元二歲在甲子五月五日於九隴縣造と銘す。李唐玄宗皇帝の時代たるよしは説かずして明らかたれども、その製産地たる九隴縣が古來琴材の名所として知られたる巴蜀に屬するは最も感興を催ふさしむ。琴材は桐を尚び、蜀桐海内第一と稱せらる。自樂天の詩に絲桐合爲琴と云ひ、蜀桐木性實楚絲音韻清と歌へるも亦その謂に外ならず。九隴縣は唐代に在りては即ち劍南道彭州に屬し、後の四川省成都府彭州治これなり。地理を按ずるに成都の北十餘里の處に位す。思ふに當時蜀桐の好産地なりしか。宋絃悉く斷絶し、千古の遺音素より憶ふべからずと雖も、製造せる時代と産地とかくまでには柄乎として現はれし、かも名琴の産地たる蜀郡の製に係れるよりすれば、古人固より人を欺かず。この琴また以て古人の言を證するに足ると謂ふべし。御府正倉院には黒漆金銀平文琴一張を藏せらる。銘に乙亥元季是造とあり。この琴を以て推せば或は開元二十三年の製に非ざるか。相並びて唐代の二名琴と稱せらる。

四五、四六 御物 琴柱及合子

栗色にして金色の模様あり。所謂法隆寺形琴柱の根本なり。赤地金欄の敷物を用ひ、推朱の合子に納めたり。

四七、四九 御物 香木經篋

通高品 三寸五分

全身

その用また古記を俟つて明らかたなりと云ふべし。器は更に金泥もて藻文を繪かれ、黒漆金彩相映じて後に所謂蒔繪美の淵源遠くここに存するを思はしむ。藻文は奈良朝時代に通行なる草花文様にして、中央に丸紋を作り、これを圍みて廻旋する四枝を配し、これと相對して四隅を緊約し、全面を整備せる條草あり。餘條即ち側面に垂れて左右よりこれを庇護するの形をなし、藻文配置の上よりしても、既に意義の見るべきものあり。この器も何の用に供せしか今考ふべからず。獻物帳よりして推せば、内部を飾るに高麗錦の類を以てし、更にこれを盛るの袋とこれを安んずる几案との存せしならむ。皆併せて知るに由なきを遺憾とす。

五一 御物 篋一部

革製 漆塗

これまた漆革箱にして奈良朝の作ならむ。破損したるも、暈調彩色ある丸紋はなほ古態を顯然せしむ。その花蕊の如き丸紋は甚だ類珍らしきものなり。

五二、五四 御物 蓬萊山蒔繪製袋篋

蓋表面 裏面

篋とは云へ身を逸して残れる蓋のみなり。地は黒漆なれども内外共に粗く塵地の金粉を蒔き、その上に金銀もて蒔繪を施す。外側は松喰鶴の亂れ飛ぶ圖にして、内側は即ち龜背に立てる蓬萊山の景なり。外側の松喰鶴は頭より翼に至る頸の後半に銀を用ひて前半

願眞が古今日録抄舍利殿寶物の條に云ふ法華經、宮上、臥、栴檀皮、上書海浮中沉香玉白、ア、ア、青瑠璃、六、生、所入經一卷、小字一行書卅四字、黃紙木軸、入玉入栴檀二別、莖云々、とあるは即ちこの篋なり。願眞が見聞以後年所を経るの久しき、今やその構造材料の一々を辨じ難けれども、幸に古記の存するに由つてその製を知るを得。即ち木地は沈香木にして上に薄き栴檀を貼り、金泥もて海部模様を畫けるなり。縁は象牙に藻文刻繪の立上り六個を造りて蓋の懸りとせしもの。今その二個を存するにて知らる。向宮の周縁に鑲めたる白玉即ち眞珠及び青瑠璃は殆んど脱落したれども、幽光千歲依然として尙存するものあるは、これ偏に鬼神の呵護によれるか。その製の奇古にして高麗ある、これを小野妹子將來と傳ふるの強ち偶然ならざるを知るべし。收むる所の法華經は別冊既に圖を掲げたり。

五〇、五一 御物 泥繪漆革箱

蓋表面 裏面 蓋側面 四方

漆革箱の名最も早く知られたるは天平勝寶八歲七月八日の法隆寺獻物帳を以て第一とすべし。この歲五月聖武天皇崩御し給へるにより、孝謙天皇先帝遺愛の珍玩供養の品を金光明寺等十八寺に分獻せられし時、御帶壹條、御刀子三口を法隆寺へ寄進せられ、右並盛漆革箱云々と仔細を注記したる勅書を下し給へり。圖示せるものはその器にあらずと雖も、革を貼り詰めて外形を整へたる上に、漆を施してこれを堅固ならしめしもの、古器の制これに依りて徵すべく、

を金とし、翼も金銀併せ用ふ。その他嘴、尾、松の折枝等皆金なり。内側に散らせる鶴は頸を全く銀とし、その他總て金を用ひ、同じ松喰鶴ながら外面にて主位となせると内面にて配景となるとに由りて手法に繁簡の差を現はしたる用意の周到を見るべし。蓬萊山は金にて輪廓の線を作り、銀にて山側を整へ、處々に金を施して光明反映の意を寓せり。點綴せる洞舎小松は金にして、巨魁の頭の後半及び甲も亦金なり。但し所謂龜甲形内の小さな文様は銀にして、頭の前半より後尾に至るまで甲縁と四足皆悉く銀なり。即ち龜の上半は金にして、その力ある光彩に蓬萊山扛負の意氣を示し、下半を銀にして軽く浮游するの感を與へしめたるなり。波紋またその意を受けて銀を用ひ、波頭を金として逆捲く力を明らかにす。材を使用する唯金銀の二種あるのみ。而もその使用宜しきを得ば繪畫的趣致を發揮することかくの如きものあり。研磨堆積の術固より未だ發達せずと雖も、徒らに豪華を金色に街へる後世の作品とは藝術的價值に於いて雲泥の差ありと云ふべし。

法隆寺に蓬萊山を見るは既に標出せる聖靈殿太子像内のものと、今は御物となれるこの宮とにして、一は木彫、一は蒔繪、材料同じからずと雖も、目指す所の相叶へるありて、製作時代も略々相近きを覺ゆ。彼は天仁年度御影安置の時の作と知られたれば、これもまた天仁前後のものとして可なるべし。嚴島神社なる平家奉納の小唐櫃なる松喰鶴を以てこの宮のと比較すれば、金銀の用法の差異を別として、松枝の描法のみにて、此のよく實物を體得して使用せると、彼の漫

然針葉を描けるとは、獨り用意の如何に係はず、その間に自ら時代の趨勢を察すべきものあり。鎌倉時代の描法も亦この宮よりは平家小唐櫃に脈を連ぬる多きを以て考ふれば、この宮を以て平家時代以前法隆寺復興の機運に向へる鳥羽天皇頃のものと斷ずるも謂れなき鑑定にあらざるべし。附記す古記には松喰鶴と載せずして鶴喰松と稱せしもあり、言句の上よりすればその當を得たりと云ふべし。

五五、五六 御物 片輪車蒔繪手宮 全形 蓋裏

蓋裏 一尺二分 横 七寸四分五厘
便(外法)二寸四分五厘
身 九寸七分 横 六寸八分五厘
深(内法)三寸五分

梨子地黒漆塗縁に錫を伏せるたるも今殆ど腐蝕せり。宮の外側は總て波に片輪車の蒔繪蓋の内側には松菊等の折枝の間に小鳥の飛べる散らし蒔繪あり。傳へて源頼朝の寄進と云ふも、その手法よりすれば足利時代の製作に係れるならむ。

五七 御物 千鳥蒔繪文臺

高 一尺八寸一分 奥 一尺五分
廣 三寸三分

黒地平蒔繪、金具鍍金水に千鳥の毛彫あり。傳へて將軍足利義政の寄進と云ふ。千鳥を裝飾文様に配せしは鎌倉時代の鏡背より起れりと思はるゝが、その蒔繪に應用せられしはこの文臺を以て嚆矢とすべきか。見存の道品に徴すれば松に松喰鶴の意匠、彫金に蒔繪

に鎌倉時代を風靡するの觀ありしが、一度群飛する千鳥に輕妙の趣致を求めてより、漸くこれを喜ぶに至り、遂にこの文臺の如きを製作するに及べるならむ。義政の寄進として、何等の雜證を存せざれども、金粉漸く密にして、手法の精巧に進めるをも併せ致ふれば、その時代の製品と認めざるを得ず。

五八一六二 御物 黒漆螺鈿鳳凰紋唐櫃

同面(長手) 短手
蓋表面 蓋裏
文様 同部分

蓋裏高 一尺四寸三分 蓋裏 三尺六分
蓋裏行 一尺五分 目 二寸一分
身 二尺九寸三分 身行 二尺一寸四分
足 高 五寸

蓋に面を取り、稍々少く甲を張る。結緒の懸る處左右に猪目透の鍍金縁金物あり。身の底縁また面取り、脚も圓に明らかなる如く、兩個の角を平にし、頭と底とに花唐草毛彫の金物を裝し、一脚各二箇の莖莖を打つ。地は内外總て黒漆なれども、金粉の極めて粗らに散れるもの處々に幽光を放つ。殊に螺鈿紋の中にありては、その軀身たると支脚たるとを間はず、總て梨子地に金粉を蒔き、支脚の面取の部分も亦これに同じ。斯くして一は螺鈿紋の全形を浮き立たしめ、一は局部の輪廓を鮮明ならしむ。唯惜むらくは年所を経るの久しき類破の跡甚だしきを修理塗替せる所多く、蓋表の如きもその色稍々古調と異り、梨子地も金色の變じて黒漆塗のみとなれるあり。されど螺鈿の用法に至りては實に勁拔を極め、廿四五片の不滅貝を配置して、巧に鳥形を象どりて文様化の妙味を發揮するのみならず、軀身

の高さを標示せる如く一尺四寸三分なるに對して、その三分一に相當する直徑四寸七八分の大紋を散らせる意匠の大膽なるは、洵にその類例を見ること稀なりとす。殊に櫃の角々正側兩面かけて配せしが如きは、螺鈿丸紋應用の最も新なる趣向と云ふべし。螺鈿の使用は藤原時代よりして單に丸紋若くは花唐草文様として現はれ、或は蒔繪と併用せられて繪畫的文様となることあり。鎌倉時代に至りてはその術益々成熟し、螺鈿のみにてよく繪畫的趣致を現はせしものなきにあらざらず。この櫃の如き斯くまで精緻せる技巧を見るべからざれども、意匠の接排を得て技巧のこれに適合せるは、想と技と俱に純熟せる鎌倉時代の傑作と推獎するに足らむ。支脚の配置も藤原時代において四方に踏張りて軀身を支持するの感あれども、鎌倉時代は威儀の美よりも實用に傾き、軀身は支脚の上に安定の地位を保つことこの櫃の如くなるを當とす。

蓋裏も外側と同じく粗き塵地に於いて、中央四隅俱に花唐草の蒔繪あり。圓に於いて左右兩側の色目の異なるは即ち後の塗替に係れる所なり。花は銀、圓々金を併せ用ひ、蓋は全く金なり。その花瓣に空漏を現はせるは螺鈿を蒔繪化したる意か。頗る趣致に富めり。この花唐草に於いても亦鎌倉時代の節を偲び得られざるにあらざらず。法隆寺にて出版せる御寶物圖繪に依れば、廣東蜀江の類の御食を納めし調度は即ちこの器なりと傳ふれども、その果して然るか否やを知るに由なし。螺鈿の技術は元と支那より傳來せられたれども、その用途風に彼國に絶ましにや、釋して邊裔國士の産、一に羅殿と稱

すなどと無稽の説を立て、宋の方勺泊宅編には螺墳器本出倭國物象百態極工巧非若今市人所售者と云へり。その技遂に我國獨特の發達を爲し、却て輸入せる彼國に誇視するに至れる所以、この概に對して思ひ半に過ぐるものあらむ。

六三—六六 御物 寄木手筥 側面四方

方 七寸七分五厘 高 五寸四分

往昔船載の寄木細工中最も注意に値すべきもの一なり。本器を載へる金剛張を取外すこと能はざる爲め、一々の材料を指摘するの便あらざれど、獨り珍木のみならず象牙、象牙角に染色せるものなど、その宜しきに從つてこれを驅使し、色彩に形象に將た文様にその美を發揮せむと努めしを見るべし。四面の文様は兩重の踊躍するもの幼兒の態を手にせるもの獅子を御するもの鳳の如き鳥を配せるものあり。甲には側面の四隅に存する玉縁付の丸紋を現はせり。これ等の文様より推せば、西域傳來の藝術分子を有する支那製のものにして、彼の獅子狩文様錦と同じき文化の徑路に依れるものならむ。古傳に前に載せたる沈香木を以て佛像を刻める後、その餘材をこの筥に納めたるものなりと云へど、今確證を有せず。我國と唐土との文化の交渉を考ふべき貴重なる資料たるのみならず、併せて唐土と西域との關係をその間に物語るべき唯一の遺品たらずんばあらざるなり。

六七—六九 御物 厨 子 正面 同(開扉)

にして瀟灑優麗の趣ありと雖も、斯る脆弱なる材料を以てして能く千幾百載後の今日に遺存し、その堅牢なること鐵籠にも比ぶべきかと怪まるゝを想へば、その構造に尋常ならざる抄技の施されたるは明らかなり。又これが主要なる材料の細竹は流記の文に斑竹とあれども、今は古色いたく曇りて竹の斑紋を検するに由なし。又その質と形状とは稍滿條と稱するものに似て少しく細きものなれども、滿條は枝多く節の邊り太きものなるに、この細竹は枝少く節も一見棕櫚竹若くは葦の節に酷似して本邦産の細竹類には絶えて見ざる全く別様のものなり。但し四隅の柱部その他に極めて少數の滿條を用ひたるれども、勿論後世の補修なれば怪むに足らず。又内部の板は法隆寺時代の彫刻に好んで用ひたる楠に似たる一種の木材なり。金具は殆ど全部鐵製にて、唯扉扉の鉸の鐵透ある表面のみに銅を用ひ、その裏座は勿論鐵透の伏金蓋も鐵板を用ひたり。飛鳥時代はいふも更なり、降て奈良時代に至りても厨子の金具には皆銅を用ひてしかも必ず鍍金を施すを例とせるに、この厨子の殊更に鐵を賞用せるは一奇といふべし。而して又この厨子を置く所の臺即ち雲形の脚を著けたる平卓とも文章とも見ゆる物は保存の目的或は持運びの便宜を考へて後人の作りたるものなり。又これが製作年代は流記の文によれば行信僧都の天平年間と解せられざるに非ざれども、右奉納大僧都行信とあるは行信所集廿卷の經文類を指せるものと解する方却て適當なるべし。製作は極めて巧妙なれども他には絶えて類品を見ざるのみならず、僅々二尺五

竹製

總高 一尺八寸三分(帶輪部) 長 二尺四寸三分 廣 一尺二寸八分
扉高 一尺五寸六分 扉幅 九寸一分
扉厚 二尺四寸七分 扉底 一尺三寸二分 扉厚 六分
正面 内部 側面 背面 扉蓋 正面一部厚寸

天平寶字五年十月一日の法隆寺東院の流記佛經并資財條に合厨子肆足、武足、斑竹、長各二尺五寸、廣一尺四寸、高二尺、著各類子、納基師法華疏經文具、交并卷也、法師行信之所集也、右奉納大僧都行信師といへる項あるは正しくこの厨子を謂へるものなり。現品の寸法を天平尺に直してこれを流記の寸尺と照比するに、長さ及び廣さに於いては僅かに分厘の小差あるに過ぎざれども、その總高に於いては寸餘の差違ありて一見不審の感なきに非ず。されども元來物の構造の花車なるとその材料の比較的脆弱なるとより推し考ふれば、これが千幾百の星霜を閱し來れる間に幾度か大小修補を經たるべきは何人も想像するに難からざる所なるべし。且つ仔細に現狀を檢査するに、四隅の柱部と臺輪の如きは殆ど全部後世の補修と見るべく、又臺輪の金具全部及び菊形鉸釘の大部分の後補にかゝるなど、修補の痕跡歴然たるものあるを見れば、寸法の小差を生じたるは寧ろ當然と謂ふべきなり。

厨子の構造は底板、天井板及び二枚の棚板を中心として四方より巧みに細竹を寄せ各板の正側面に向つて細竹の棧を押し、菊形の鉸を打ちてこれを固め、而して四隅の柱を附け、扉蓋を加へ、扉扉を設け、臺輪を廻はして以て厨子の形狀を作れり。打見たる所極めて花車

寸の小物なれば時代の特徴を察するにはあまりに便り無き感なきにしもあらず。されどもその扇鉸の形狀鐵透に現はれたる奇古遺體なる一種の手法の盛唐以前の藝術に屬すべきは敢て識者を待つて始めて知るべきに非ざるなり。而して飛鳥時代より我邦と交通の歴史を有したる支那江南一帶の地は由來竹類の豐産地にして、小野妹子が御命を奉じて經典探訪を爲せしと傳ふる所の南嶽衡山は實に江南の一聖地なり。故を以て人の或はこれが製作地を江南に求めむとする者あらば直ちにこれを斥けて無稽の妄言と斷言するに躊躇せざるを得ざるなり。

七〇 御物 石名取玉

寶天

古今日錄抄に、五歲六歲御持遺物水精琥珀石取水瓶形雙六とある。水精方珠の石名取玉なり。

七一—七四 御物 八 臣 瓢 蓋表 同 側面

身高 四寸七分 口徑 三寸八分
底徑 二寸九分 扉幅 一尺六寸二分五厘
蓋高 八分五厘 蓋内徑 三寸七分

顯貴の古今日錄抄に云ふ。八臣、盛唐土俗學生面々所好之物、山水木立諸人形悉成付、人形雖有九人、其中榮啓期非臣家故云八臣、八臣者所謂繪里季角里先生袁公、同、夏黃公已上四皓、鬼谷先生張儀、蘇秦、榮啓期、孔夫子也。と、同に據つて見るも一々その名あるを以てこれを明らかにすべし。

蓋には中央に方形に配せられたる蓋文あり。その廻りに同じ唐草文様を散らせり。この蓋文の材料とその配合よりすれば、奈良朝時代に作られたる様式とすべく、従うてその出發點の唐代に存せしを推定し得られざるにあらず。孔子榮啓期より漢代の四時を現はせるよりすれば、その本源の支那よりせること愈々歴然たるのみならず、從橫家を主として四時榮啓期を加へたる思想より見れば、六朝時代の流風を傳ふるものと云ふべし。

瓢の用は古くより支那の文獻に散見す。思ふにこの器六朝時代の制に鑑みて唐初に成れるにあらざるか。その製作法に就きては、目錄抄に悉成付と云へる如く、瓢の未だ盛に生りつゝある間に於いて所定の文様物象を現はすべくこれを割せる典型にて包歴せしめ、適當の時期に臨みて裁去し乾燥せしめて後用具とせしものならむ。形製奇古眞に人を驚かすものあり。

七五

御物 青磁 壺

高 八寸七分餘 口徑 四寸五分 胴圍 二尺三寸八分

總て青磁の觀を早し、底より胸へかけて厚く流麗を施せり。頸に近く高九寸と撰書し、脇に佛字あり。口を覆ふに古代錦を以てし、緋房の緒を以てこれを約せるは一見茶壺の感あれども、中に丁子六袋を納むるのみ。もと何の用に供せしか知るべからず。思ふに朝鮮國より渡來せしものにあらざるか、姑く疑を存す。

七六

御物 盤繪摺型

徑 一尺一寸七分

盤繪は一に盤繪と云ふを可とし、盤旋せる動物と廻雲とより成れる九枚の義よりすれば、さもあるべく思はる。黒にて摺摺にせる文様なることは實物を一見して首肯せらるゝ所なれど、盤繪摺の廢れたる今日に在りて、その摺型の保存せられたるは他に未だ聞き及ばず。これ特にこの具の貴重せらるゝ所以なり。本型表裏に刻文あり、その文大同小異なり。表裏併せ用ひて各種の文様を作るに便せしなり。

七七

御物 輿 飭

七八

同 高燈臺

輿 高 二尺 幅 三寸
燈臺 高 二尺四寸七分 反照板 八寸九分 體徑 八寸四分

共に白河法皇御所用のもの傳ふ。御輿は吹玉俗に言ふ南京玉を巧みに綴りて組成せるものにして、白き玉の地に黒き玉の文字を現はし、赤青白の玉を用ひてその周縁を飾りたり。而してその文字の宋代の習味あると物質の全く舶載品なることを考ふれば、寺傳の信ずべきは勿論又珍貴の遺品たるを失はず。

高燈臺は柱及び臺は黒漆塗、反照板は胡粉地に著色にて繪を著けたり。この類の燈臺は珍らしきものに非ざれども、これがその根源なることはそれ等を法隆寺短檠と稱するにても明らかなり。

七九

御物 玩具 甲冑

傳へて上宮太子幼時の御玩具と云ふも信ずべからず。形小にして玩具と見るの外無けれども、その制全く大鎧を縮せしものにして、頗る珍玩と稱すべし。冑は木製著色、粗らに大星を打ち、吹返に染革を用ゆ。甲は澤瀉威、小札は漆革、櫛金物、鎧金、鎧走の染革まで、源平時代由ある武者の著領を偲ばしむるものあり。容器は紙製根來、また古色の櫛すべきものなきにあらず。

八〇

八一 御物 劍

共一

刀 長 五寸餘
鞘 長 一尺七寸餘

第八十回に現はせる身と鞘とを別にせる一口は七星劍にして、第八十一回の一口の鞘の儘なるは刀身、鑄著せるを以て文様の有無を明らかにすること能はざるものなり。七星劍はもと法隆寺金堂なる持國天の右手に取らしめたるものにして、今他の一口の劍はそれと並び立てる増長天の右手裏に在りしものとす。古今目錄抄に據れば、

次持國天御大刀者太子七歳已前御守也爲未來衆生濟度令持此天或云爲國土安穩令持此天云々其大刀長□金銅也雲形七星形裏面打氣柄卷銅非見此大刀之輩者群除兵杖之類云々
次増長天大刀此大刀爲本造給但無七星等云々
とありて持國天は七星劍、増長天の大刀は素文と見らるべければ、鞘の儘なる一口の劍はそれと定めて可なるべし。二口の劍とも造様

略々相近くして、櫛は目錄抄に叙する如く銅線を以て巻き上に漆を塗れり。縁頭等の金物は金銅製にして唐草の毛彫あり。鞘は黒漆塗と見ゆれども、七星劍のは鞘々赤味を帯びたるは黒漆の下に色漆を塗れるか、兩劍この色の異なるは破損の多少の差違の外長さに於いて素文劍寸延と見えて、七星劍の鞘の一尺七寸なるに、これは一尺九寸と測定せらる。七星劍はその名の如く中身に雲山月及び七星を毛彫にし、目錄抄に記する如く、もと鍔金なりしも今剝落してそれと知るに由なき程なり。製作何れも簡素なるうちに高古の風情あり。その時代の二天王等と同時に成れる孝徳天皇頃と思へば、寶劍の制を徵する上にも唯一の遺品たりと云ふべし。

八二 御物 梓引

長 六尺五分

胡錄

長 二尺四分餘
幅 五寸一分

鎗箭

長 二尺六寸九分五厘

利箭

長 二尺四寸八分五厘

乃は下繪黒漆上に色漆を塗る。背に長く細箭を造る。傳へて太子御使用のものといふ。鎗箭は頰を象牙にて造り、鎗形を水牛角にて製し、六孔を穿つ。次の鐵を缺けるものは目錄抄に上刺二筋と云へるに當れるか。鐵を挿むべき装置にして、古く我國に於いて使用せられし様式なること發掘品に於いて徵證せらる。所謂利箭は鐵の長さ二寸四分あり。目錄抄に十筋とあるも、今五筋を存す。又盤

の羽を以て短くとあるも、今毫毛だも存せず、古傳に従ふの外なし。胡蝶は繪製密陀僧にて花丸紋を畫く。底にも同じく小紋花を散らせり。推古紀十一年條に、太子天皇に請うて大幡及び靱を作り給ふとあり。これ等の武器古傳皆太子の御所用と稱するも、亦太子が特に心を武具に用ゐる給ひしより推してその因由なしと云ふべからず。

八三 御物壺 鏡

鐵製古今目錄抄匠に壺鏡一具として著録す。その製奇古、靱を半載したる形を爲し、以て乘御に使ならしむ。太子時代の遺品として類例他に存することなし。

八四 御物 聖德太子御鳥

爪先高 二寸三分 體高 一寸六分五厘
爪先より體までの強 七寸六分五厘

この御鳥はもと聖德院の本尊なる太子御影像の御料として靈前に在りしものなり。この聖德院の御物となりて今代ふるにその摸造品を以てす。木造黒漆繪御物太子御影に見えたる鳥皮鳥の古容を寫せるに似たり。

八五、八六 御物 氈

紅毛氈長 七尺三寸 廣 三尺七寸
黃毛氈長 七尺九寸 廣 四尺五寸

圖に於いて全部を見はすには紅色を上とし黄色を下とし、局部に在りては黃上紅下としたり。所傳詳らかならず。天平十九年の資

財帳には氈三十四床を録し、緝織氈花氈等の目を挙げ、長廣に大同小異あり。その特に目を注せざるもの多きに居るは何の色たるかを知り難しと雖も、當時色毛氈の既に存在せしを證すべし。圖に挙げたるものまた資財帳録進中のものか、今これを明らかにするの途なきを遺憾とす。

八七 御物 龍 鬘 筵

型 二尺三寸 横 二尺二寸四分

龍鬘筵は敷物の一種なり。延喜式には龍鬘筵又は龍鬘席と云ひ、後にはりうばんとのみ云ひならはせり。狩谷掖齋は倭名鈔に註して龍鬘が古今注等の古書を援引して曰く、龍鬘席を作るの語あるも、龍鬘席の名嘗て見ゆる無し。按ずるに唐宋間の俗寫に鬘字を鬘字に作るの癖あり。流風傳染して遂に龍鬘の名のみを傳ふるに至れるなりと。次で同書草木部石龍鬘和名字之乃比多比の條に註して曰く、石龍鬘は龍鬘が所謂縉雲草にして、本草には龍鬘草と同一なりと説けり。龍鬘草は即ち蜀本圖經に、草如縉雲生、俗名龍鬘草、今人以爲席者と載せ、明の李時珍は、龍鬘叢生、狀如縉雲草及臭草、苗直上、夏月草端開小穗、花結細實、並無枝葉、今吳人多栽、蒔織席と辨晰するに據れば、那俗古比計と呼ぶものにして、即ち備後國に用ゐて以て席を織る所のものなりと。是によれば龍鬘筵は龍鬘筵の誤にして、龍鬘草は即ち席を織るの原料、我が織席を以て有名なる備後の製品と異ること無しとの考證説き得て餘蘊なしと云ふべし。圖に示せるもまた純然たる席にして、その原料また備後の所産と同一のものなり。思

は云ひながら、法隆寺が何物をも保存し來れる特質の他に超越するの一端を偲ぶに餘りあり。

九二 大升 及 升

大升 内長九寸五分 深三寸七分五厘

大升に文字なく、五個の一升升には左の文字を刻みたり。
第一の升には上宮王院、第二にはシバ屋敷地子升坊米、第三には同音經倉、文明、甲八月日沙汰人、行秀、第四には上宮王院長藤三郎、五月三日地子升、揚生座、又第五には上宮王院、觀音講升、移康、正二、二月日堂司重秀と是なり。

八八、八九 疊 四 枚

一枚長 八尺一寸五分 廣 三尺五寸五分
三枚各長 七尺五寸 廣 三尺四寸五分

圖に挙げたる疊目の嚴密なるは長尺のものにして、その粗なるは長廣共に短き殘れる三枚なり。前に述べたる氈と同時のものと思はるれど、何等記録の證すべき無し。

九〇 御物 工 匠 具

九一 同 同

一は挽斷の用に供し、二は削去の具として使用せられたるものなるべし。今何時代の制たるかを詳らかにせずと雖も、過去の具たるは斷手として疑ふべからず。これ等の用具によりて建立せられたる堂塔伽藍の遺存するもの多かるべけれど、そのよくこれを傳存し來れるもの、法隆寺の外に未だ見聞するに及ばず。今や御府の藏と



PL. 1

1000 1000



PL. 2

40. 15. 1914



PL. 3

PL. 3

PL. 3



PL. 4

新羅石像





PL. 7

PL. 7

PL. 7



PL. 10

4311 104



PL. 9

PL. 9

PL. 9







PL. 1A



PL. 1B



PL. 10

10 2 10 2 10



PL. 16



PL. 17



PL. 18



PL. 19



PL. 22



PL. 20



PL. 23



PL. 21

A. S. K. 252



PL. 22



PL. 23



PL. 27



PL. 28

東京府立博物館蔵



PL. 25



PL. 26



PL. 27



PL. 28



PL. 32

1919

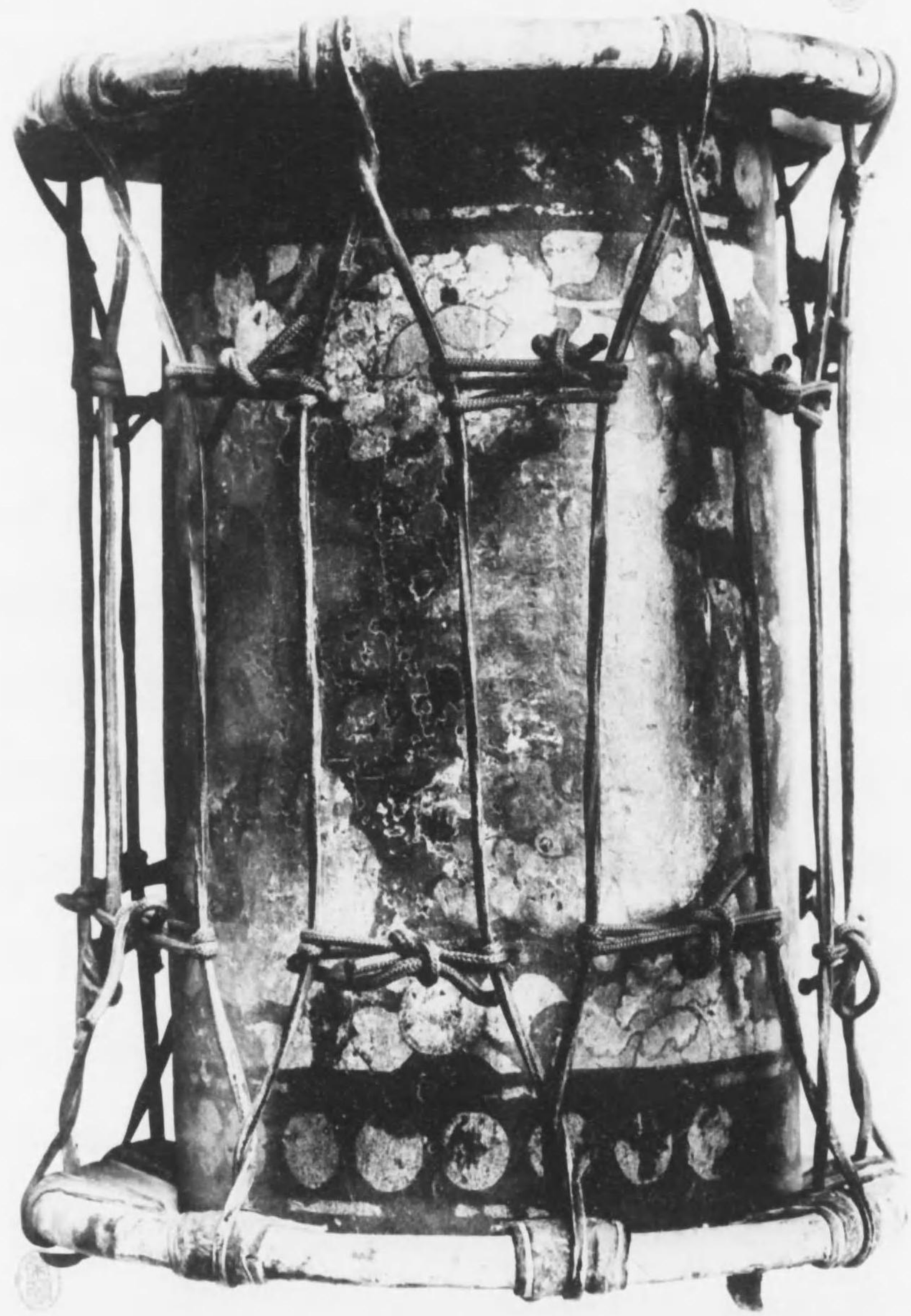


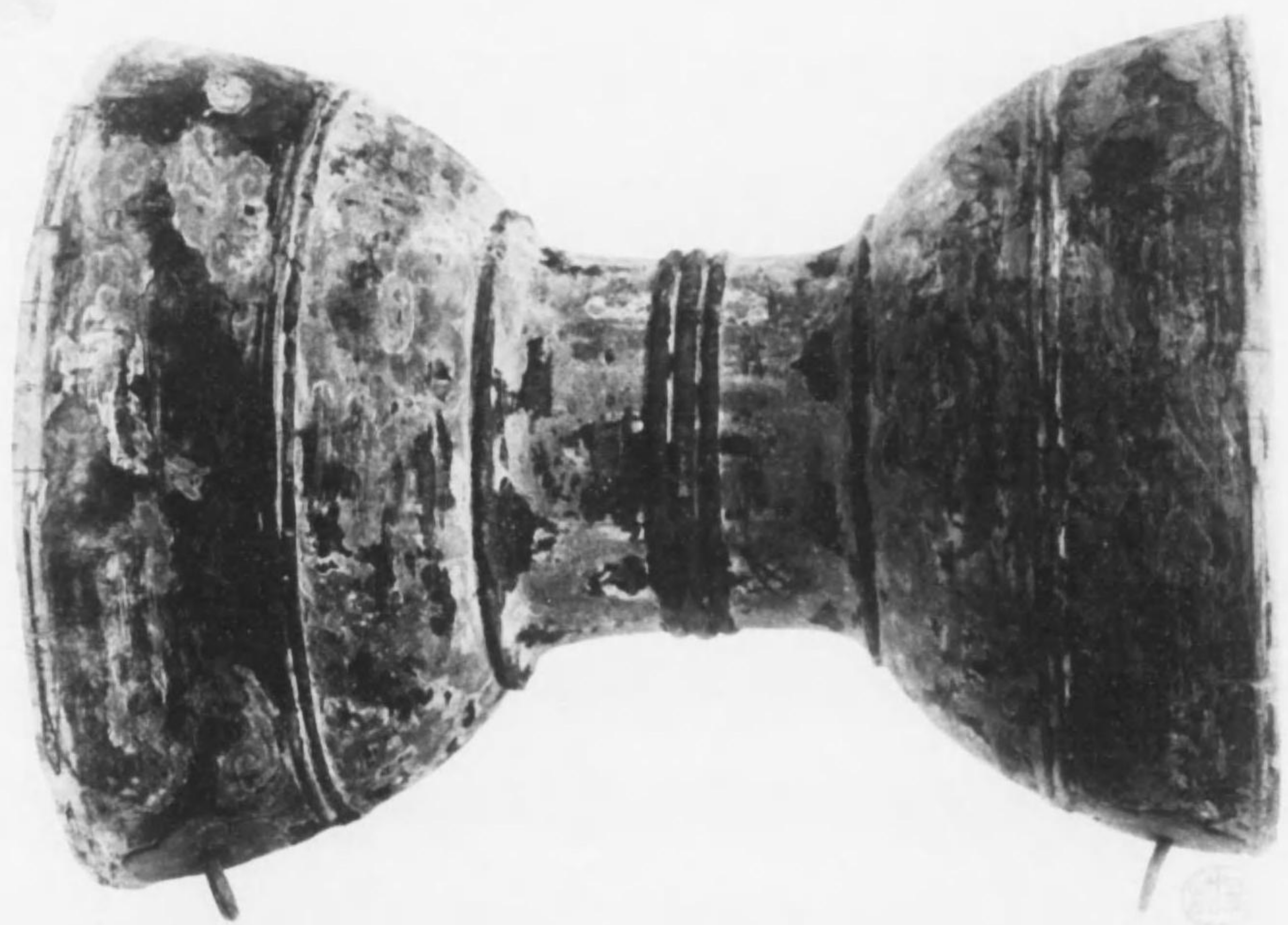




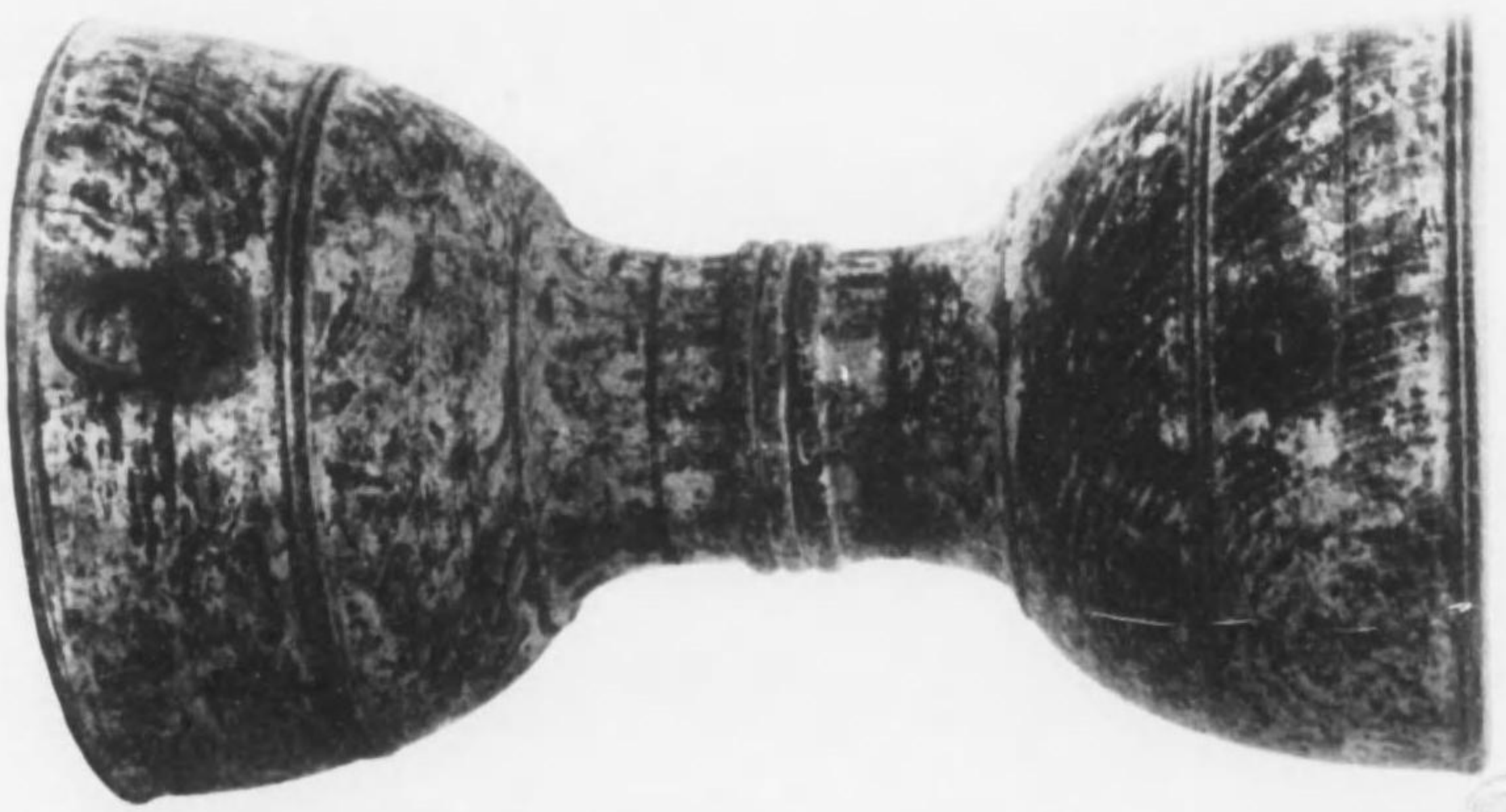
PL. 26

PL. 26





105. 1784

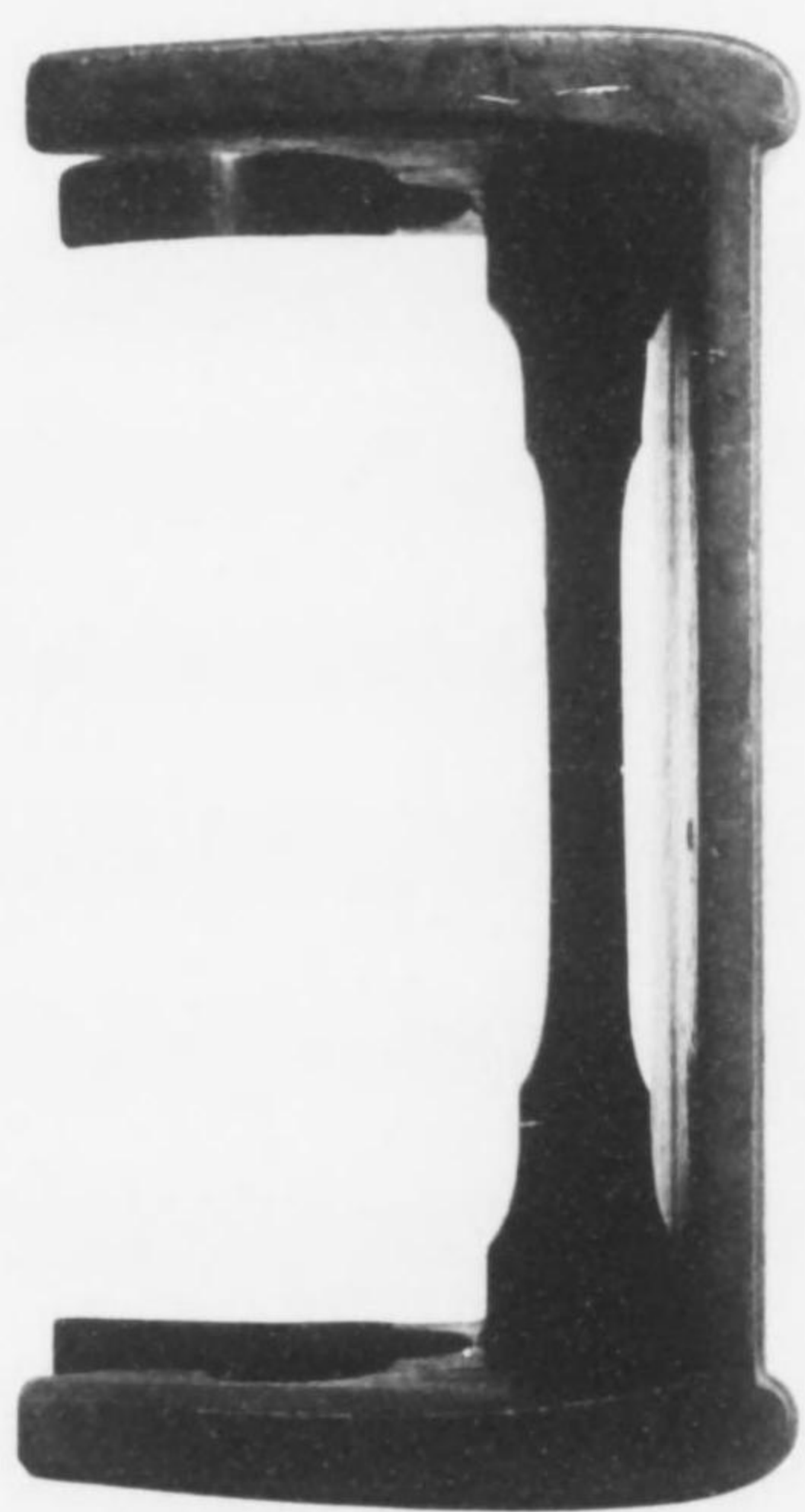
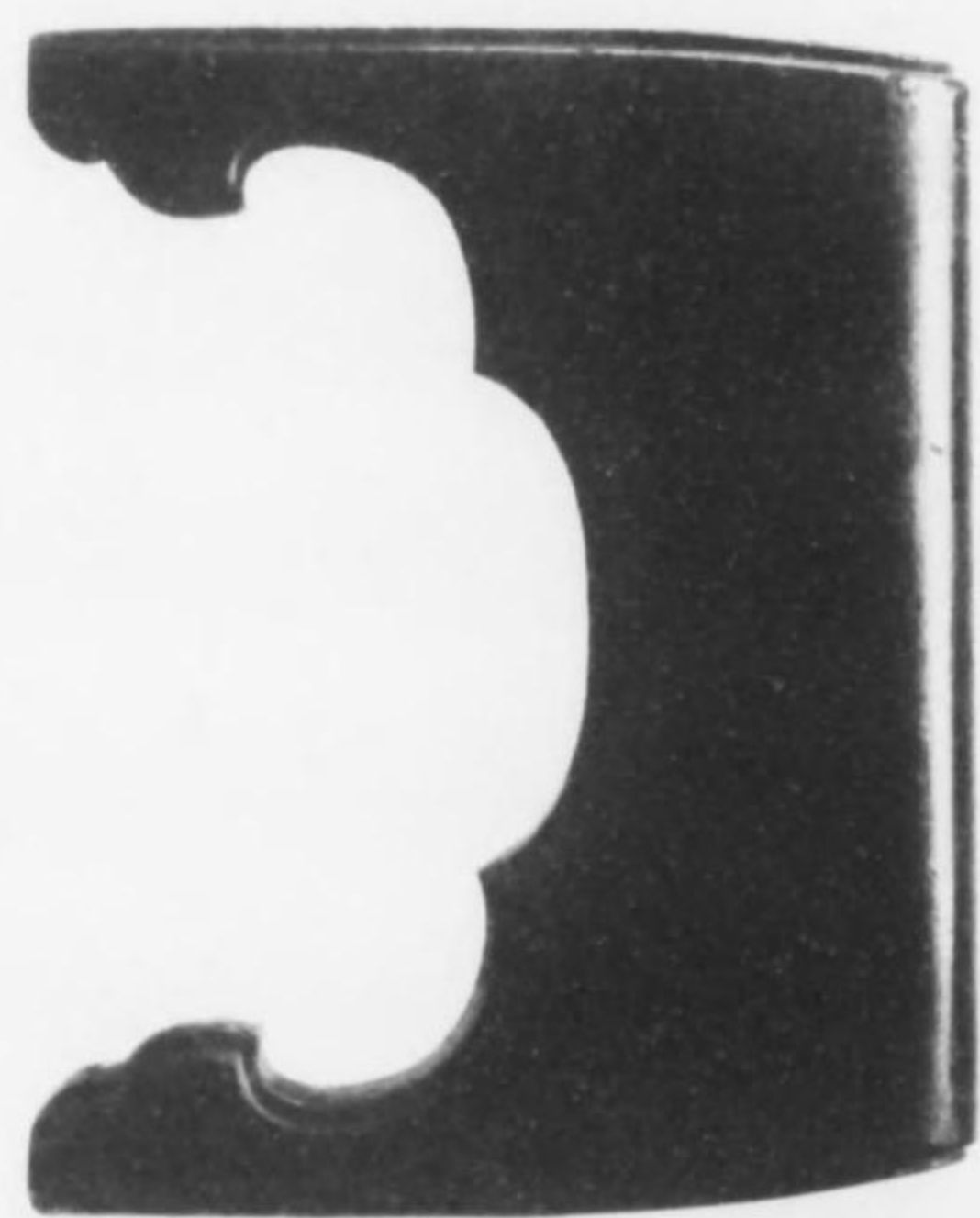
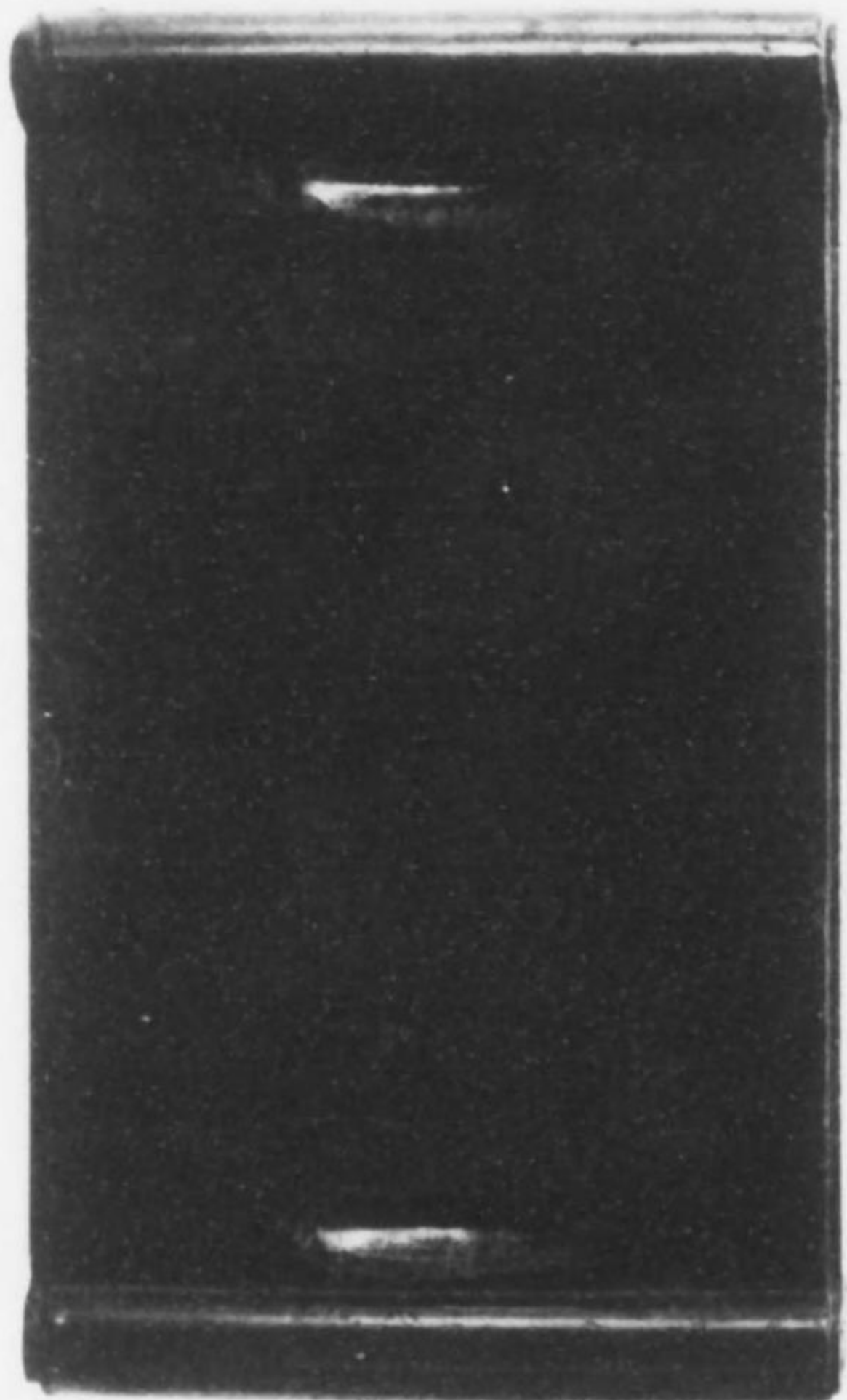


106. 1784





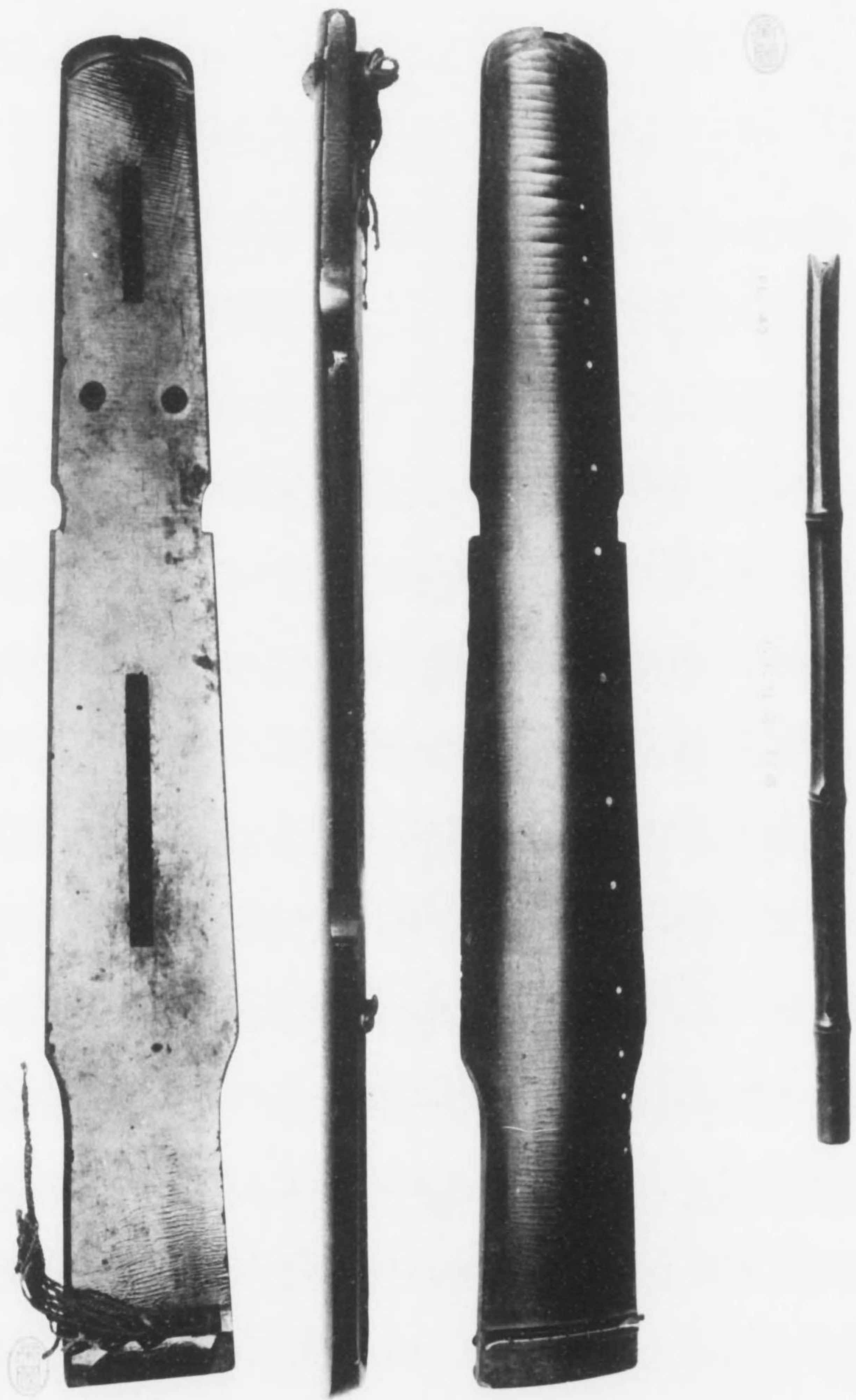






PL. 42

18. 11. 1920





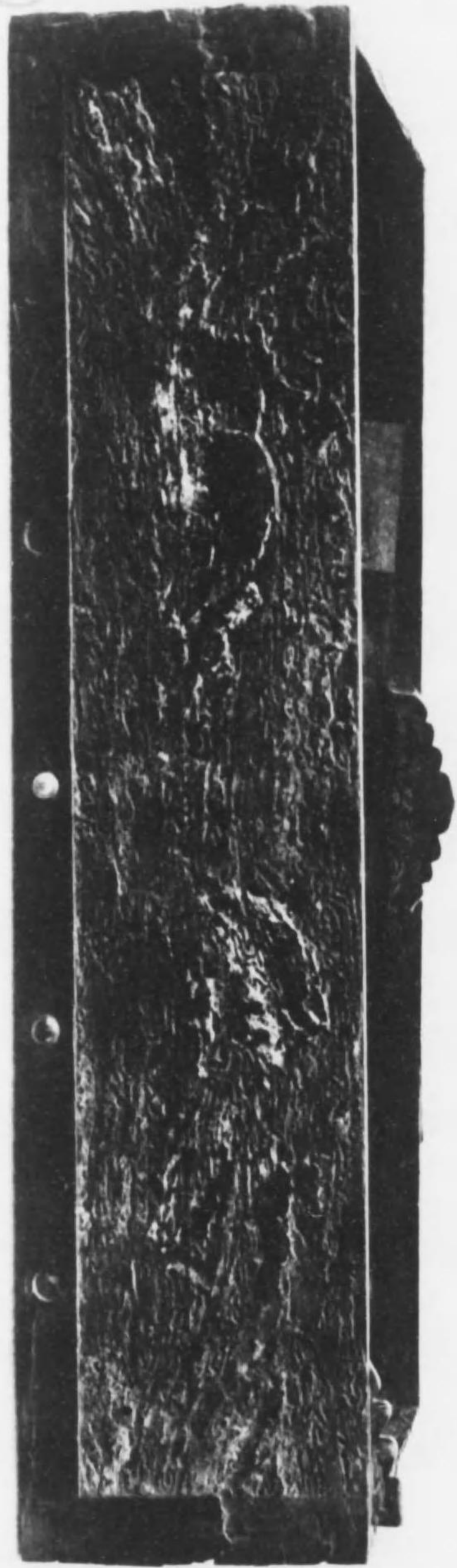
PL. 46

子 合 器 器



PL. 46

子 合 器 器



1874

1874

1874

1874





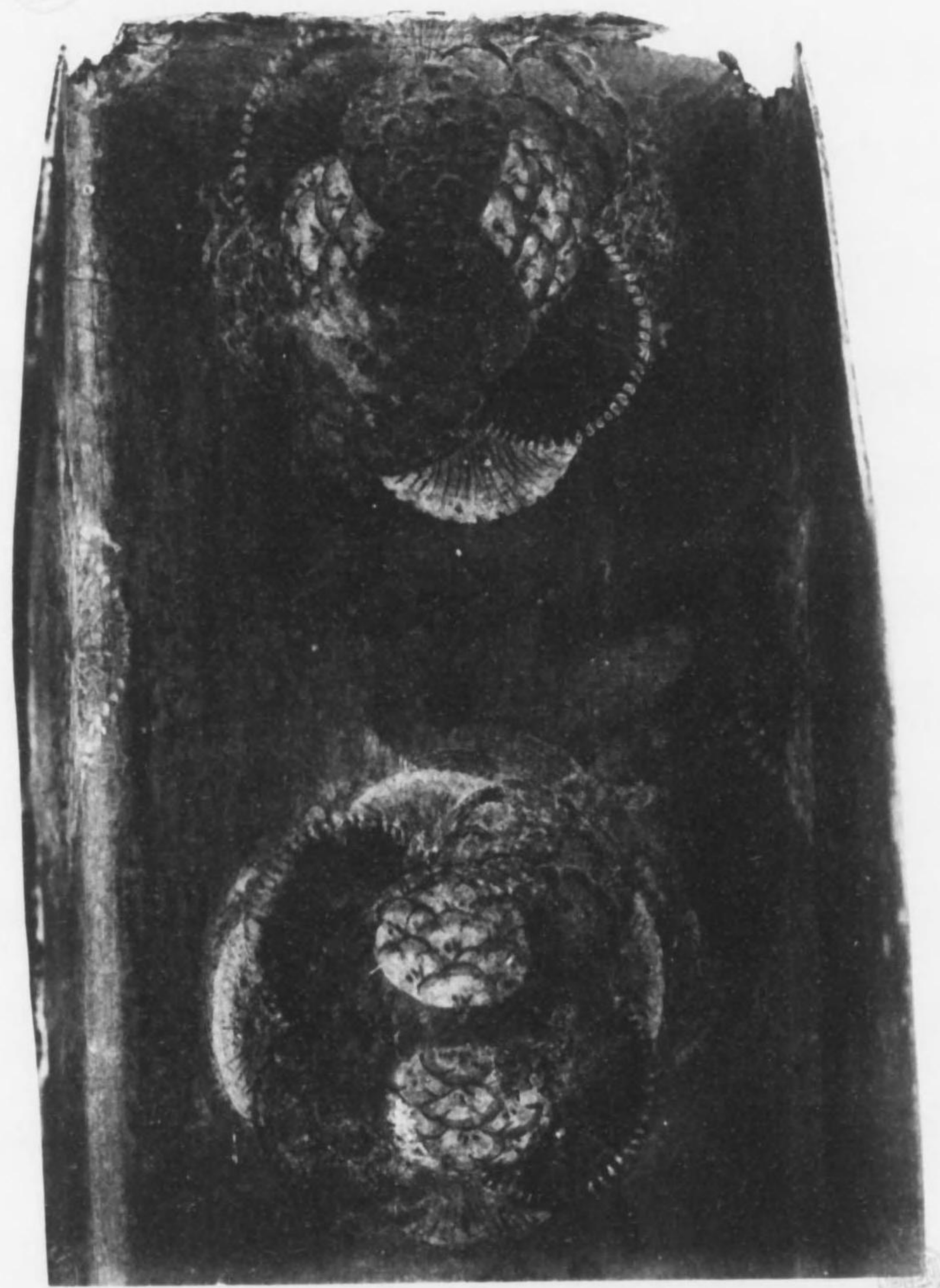
PL. 80

1844 80



PL. 61

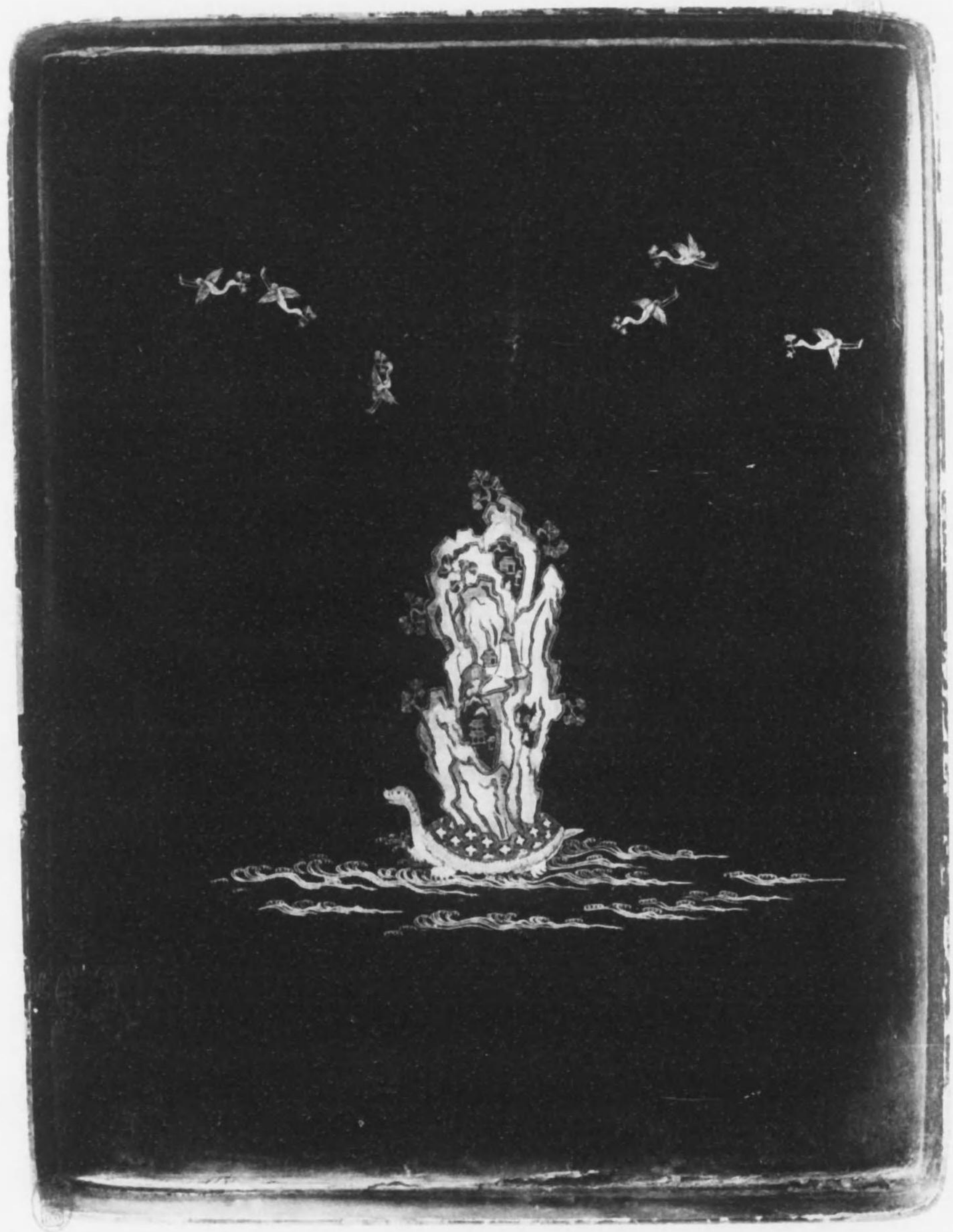
BRITISH MUSE





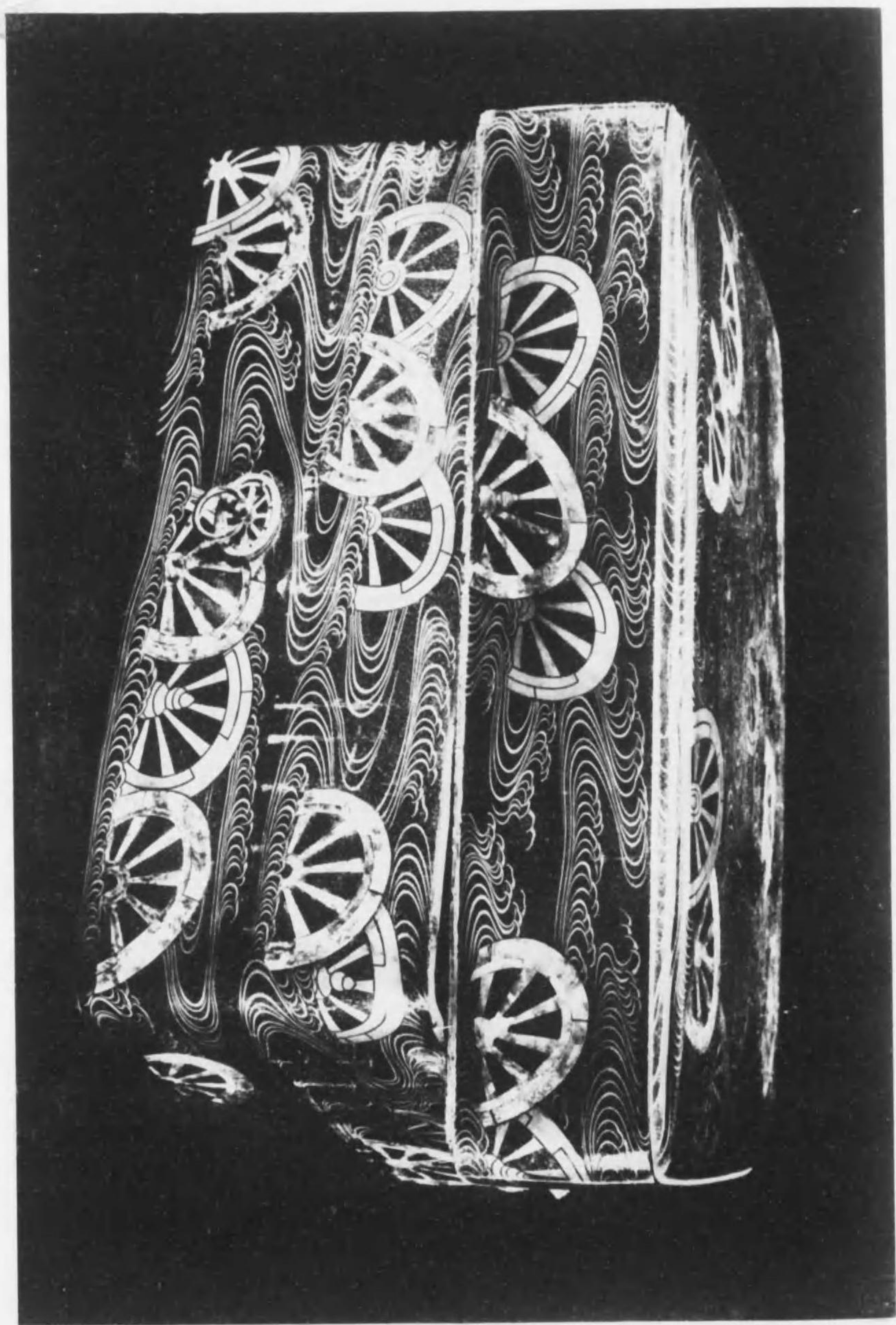
PL. 51

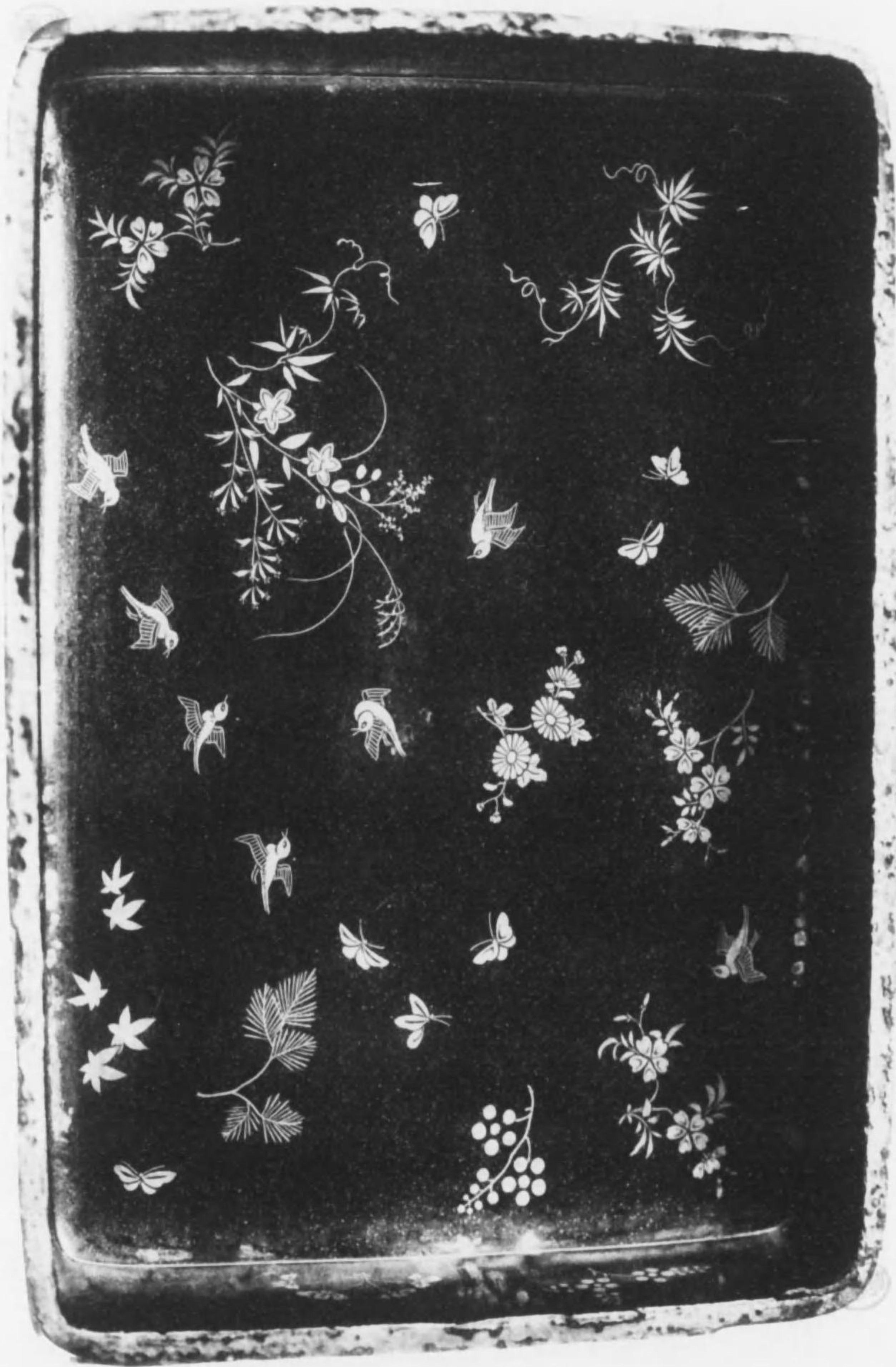
THE HOUSE IN

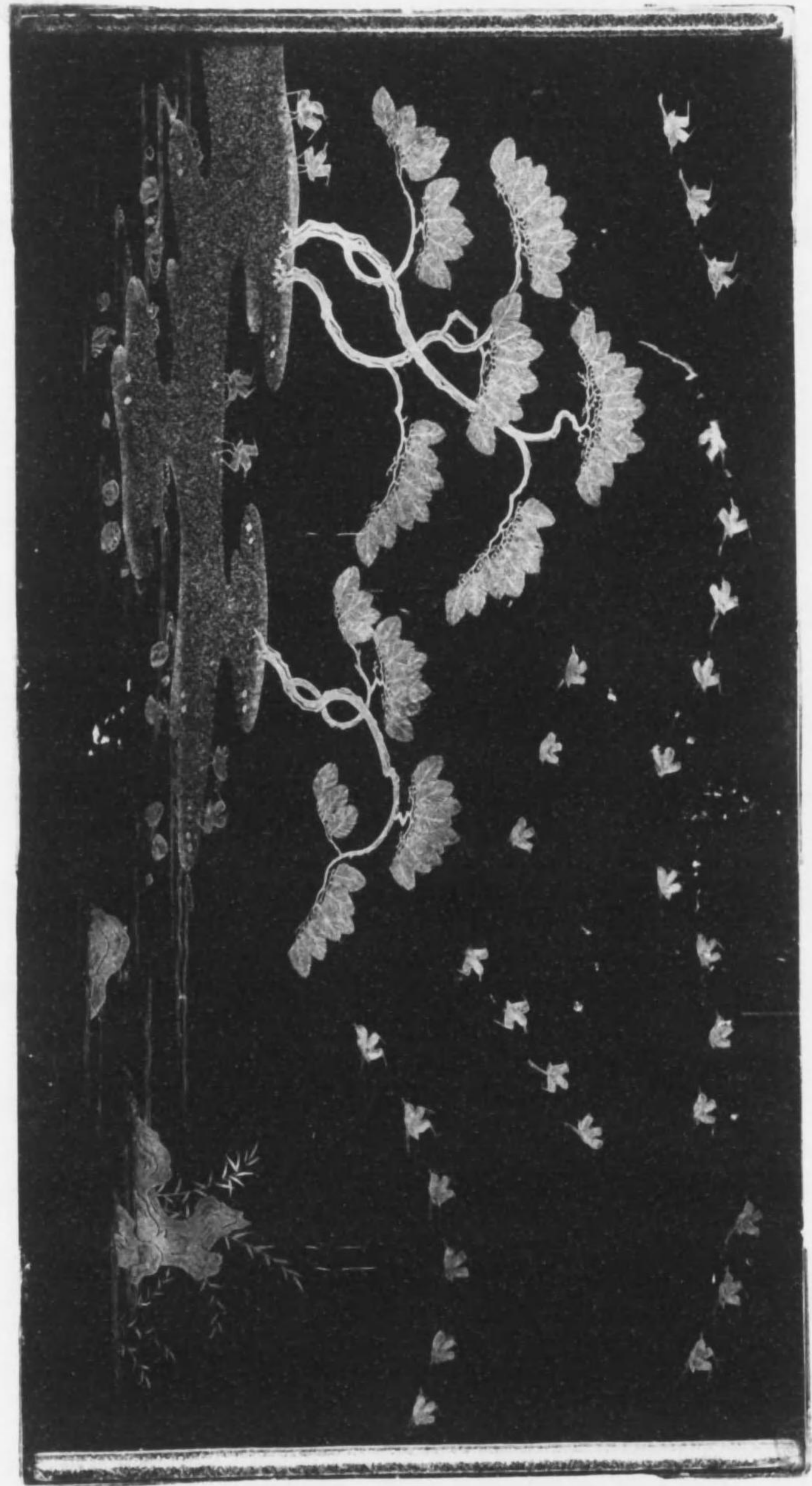


PL. 24.

PLATE 24

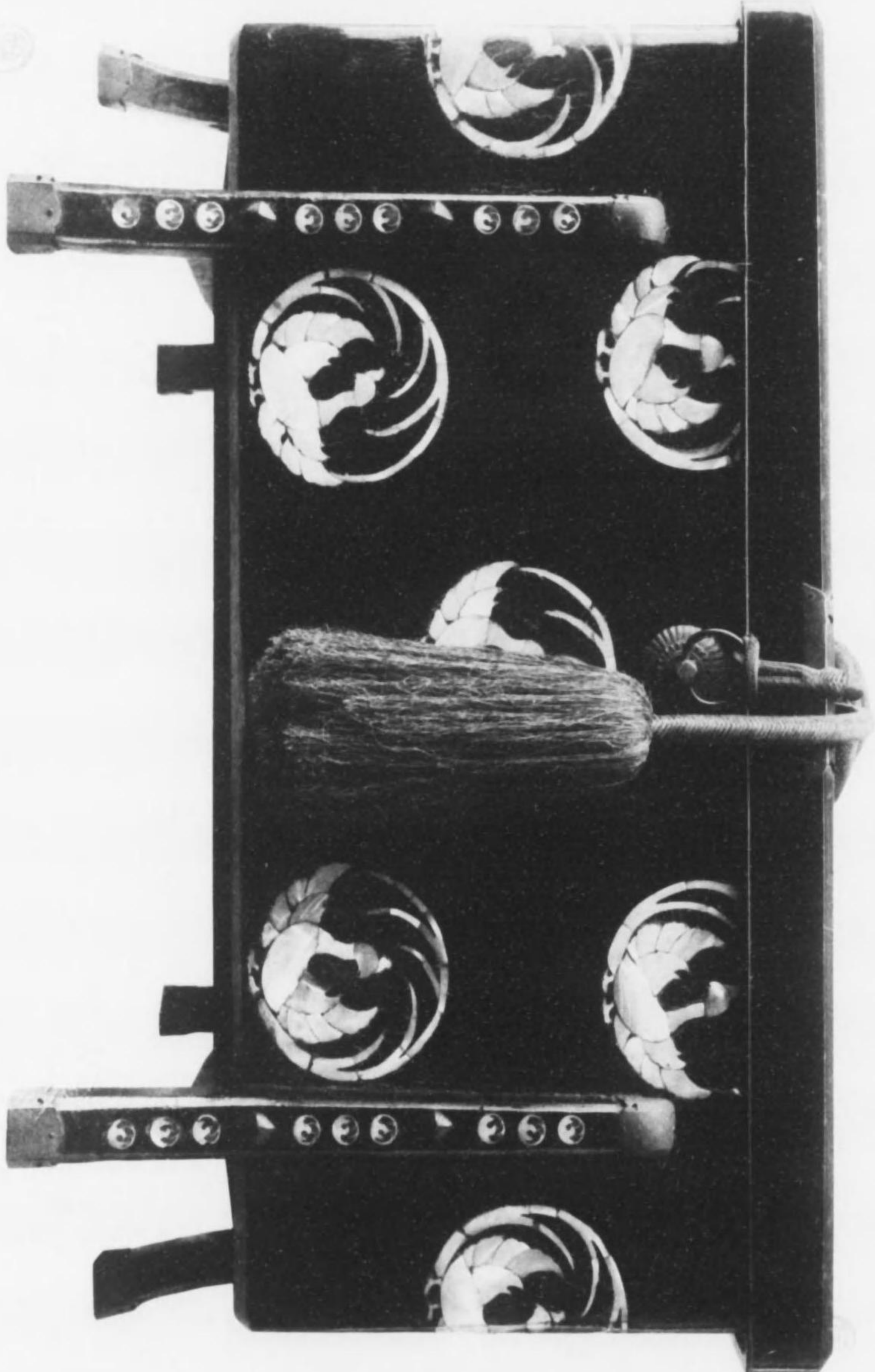


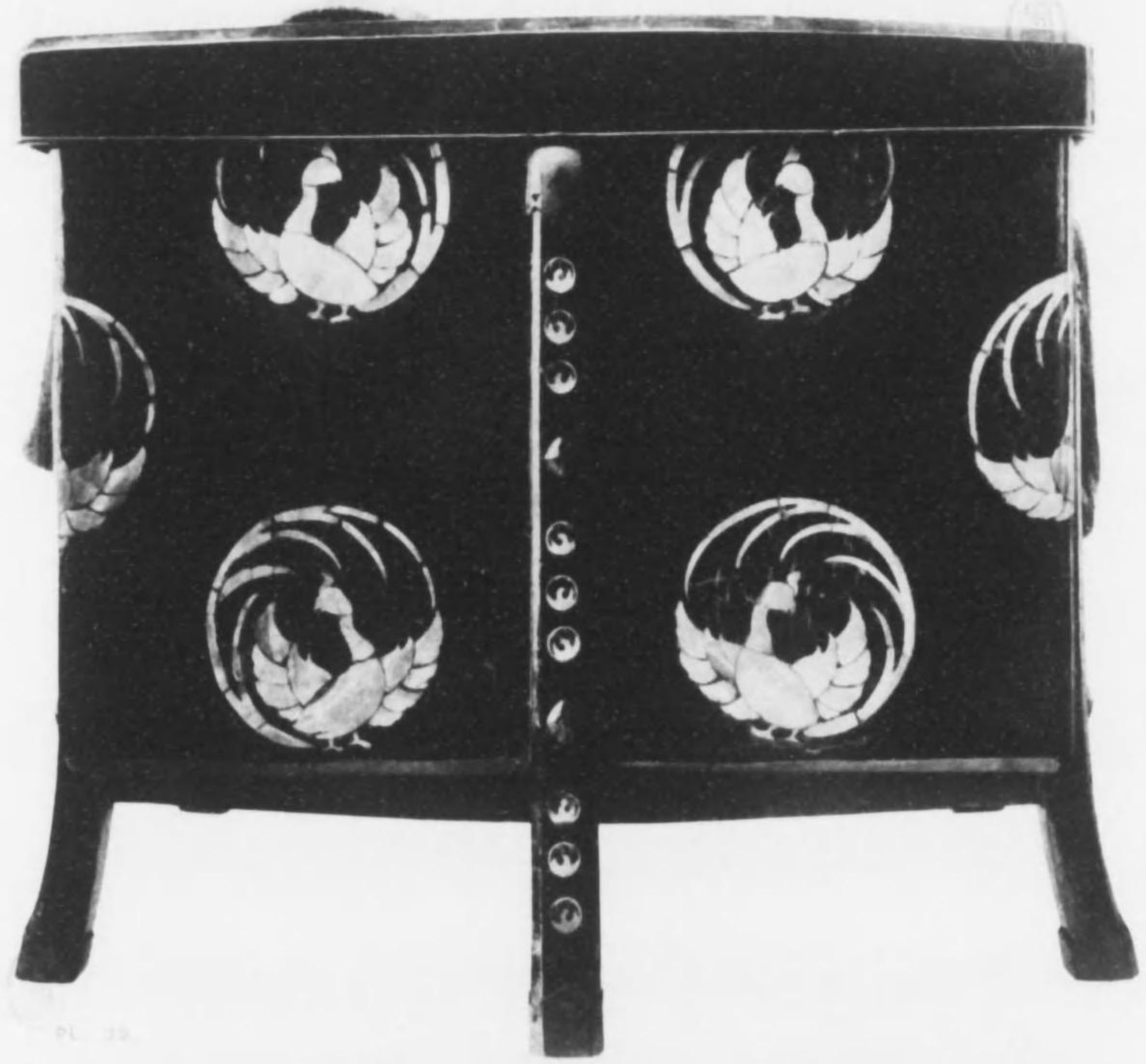




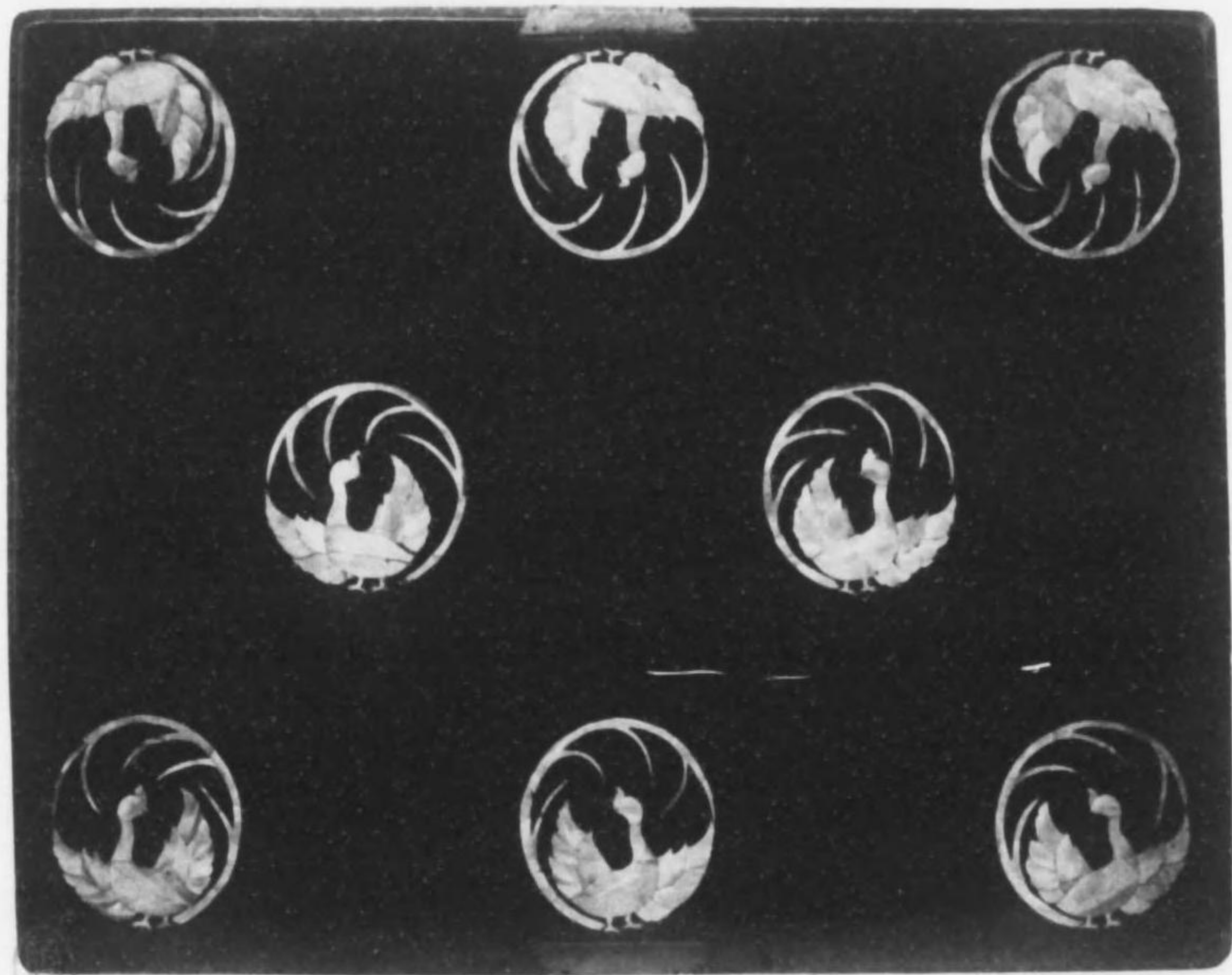
PL. 17

NO. 17



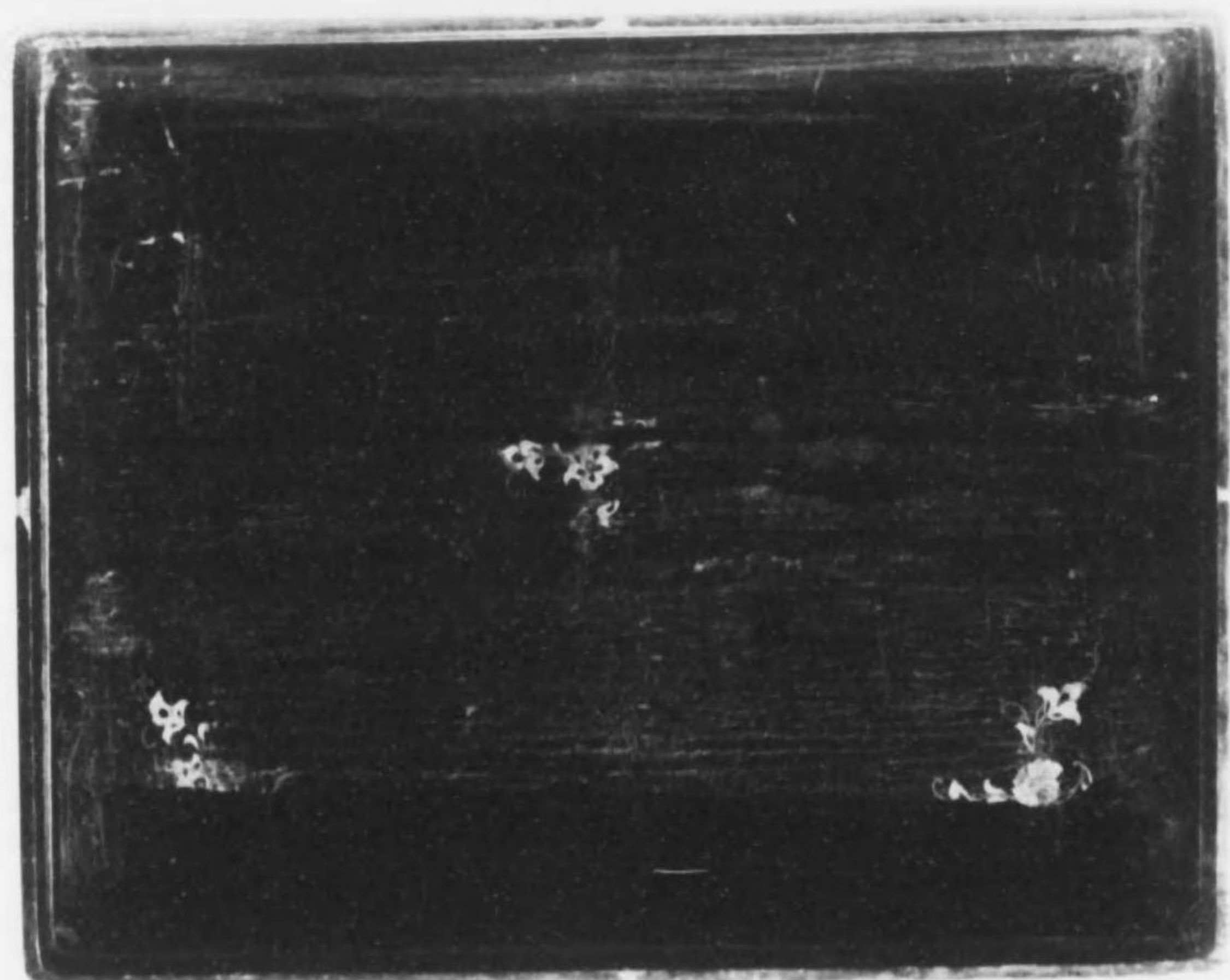
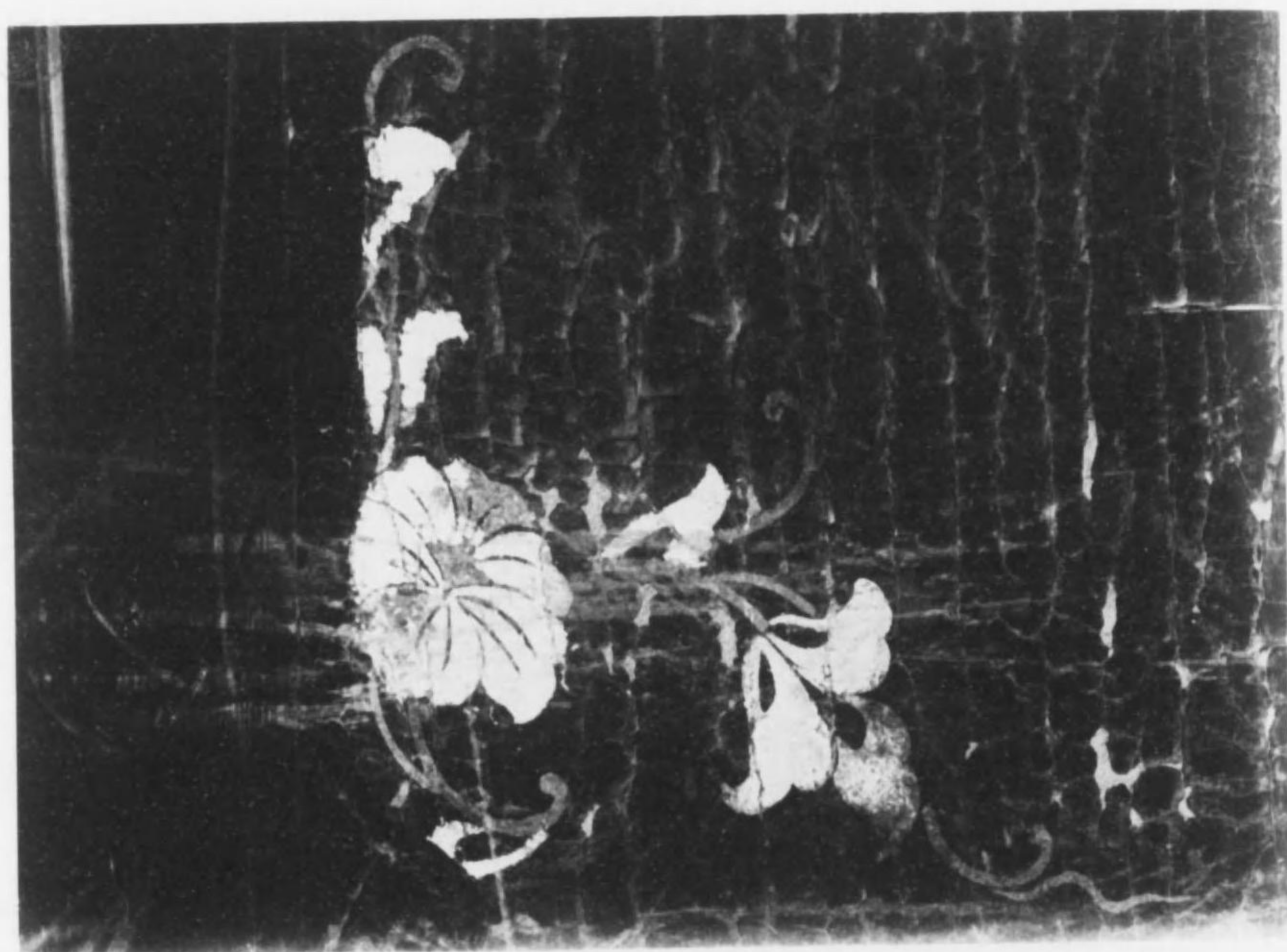


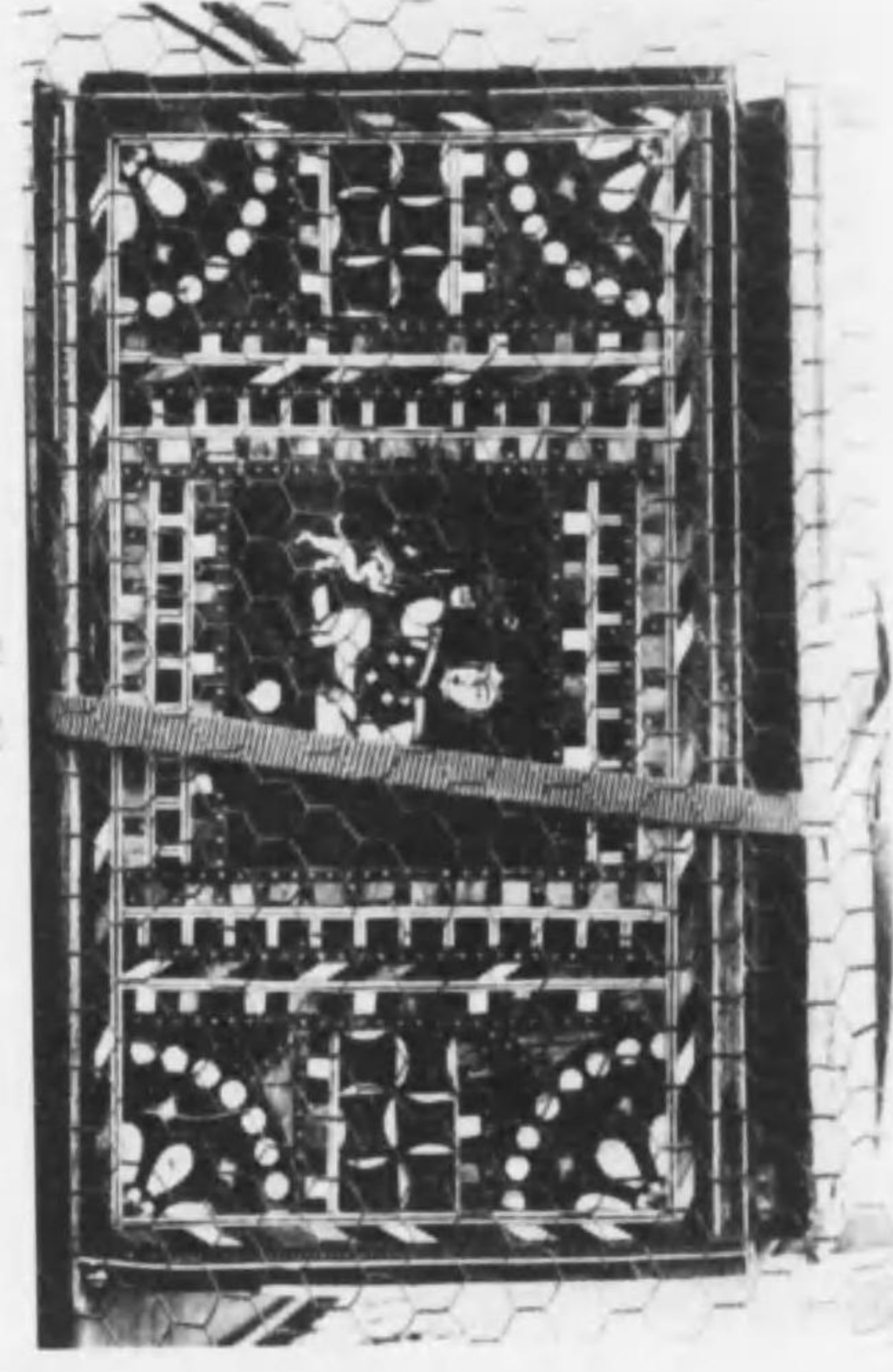
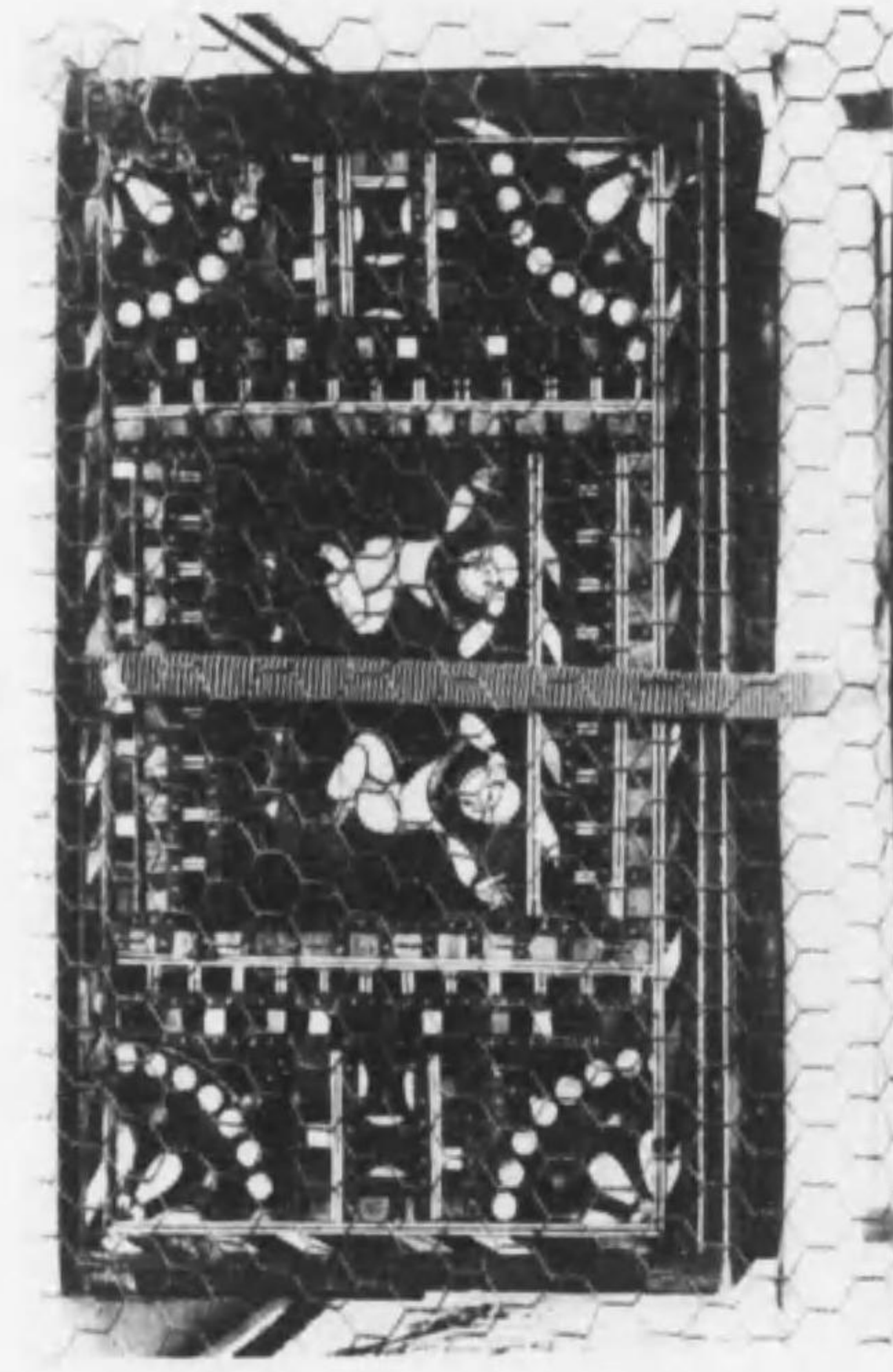
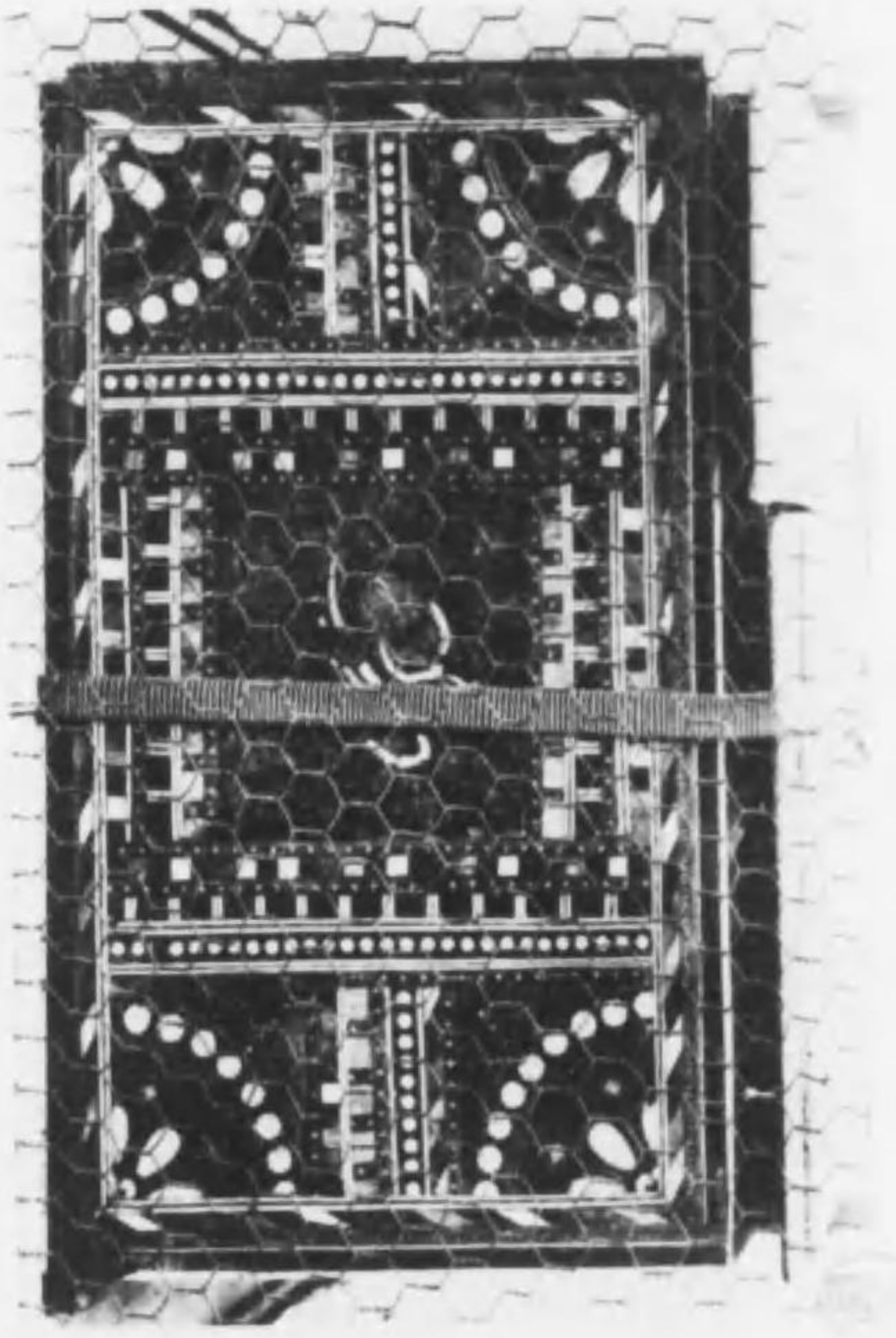
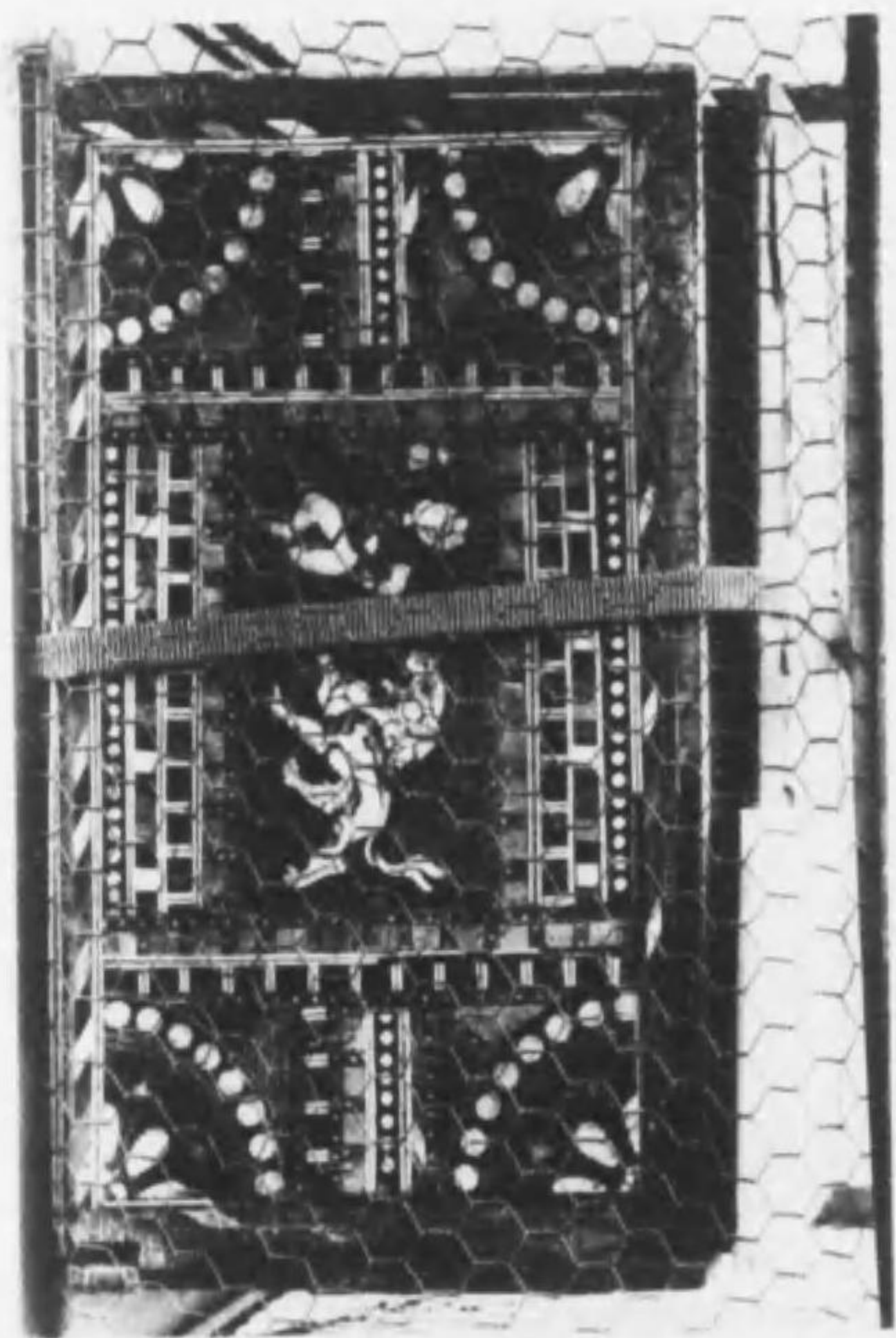
PL. 58

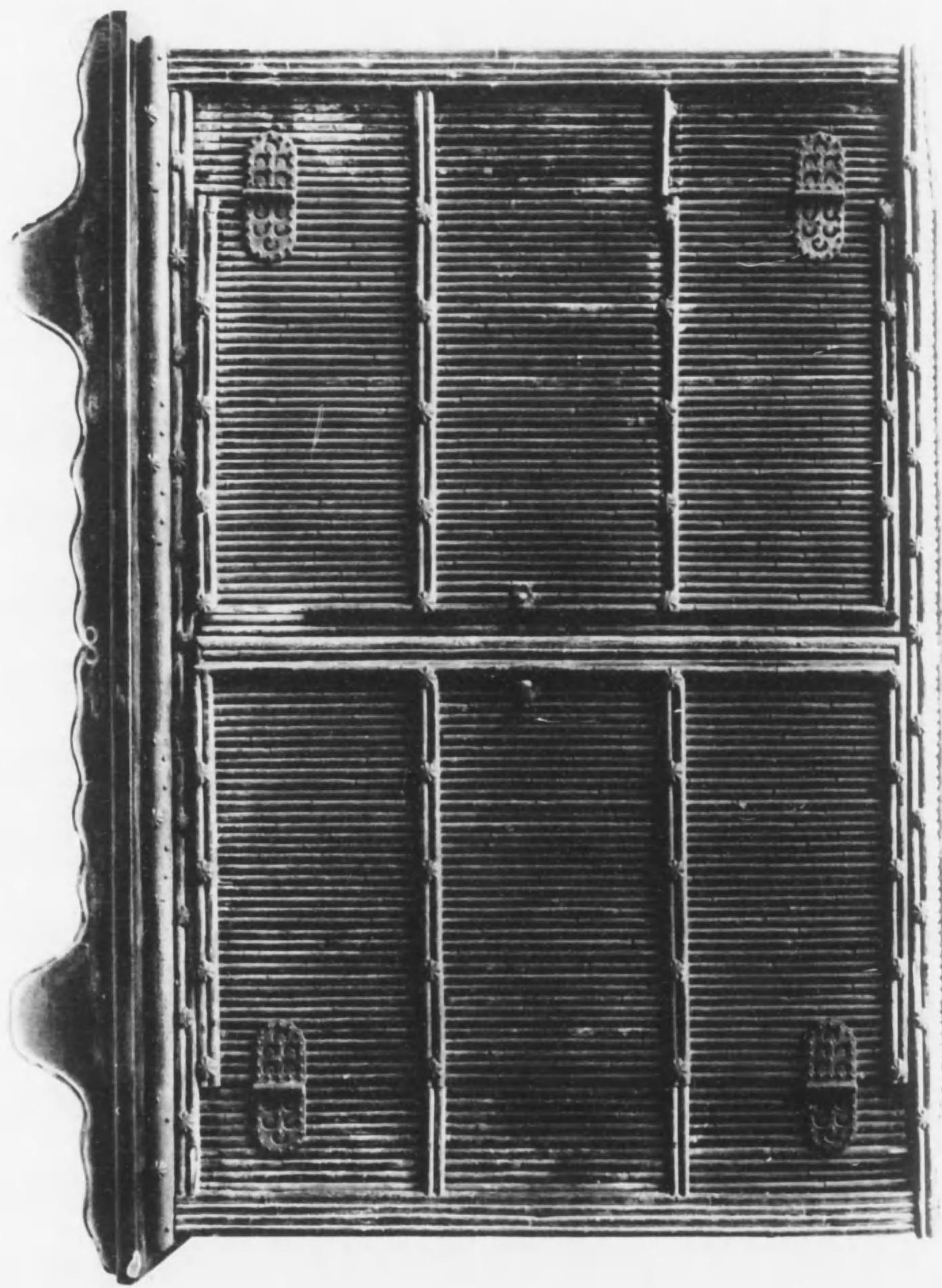


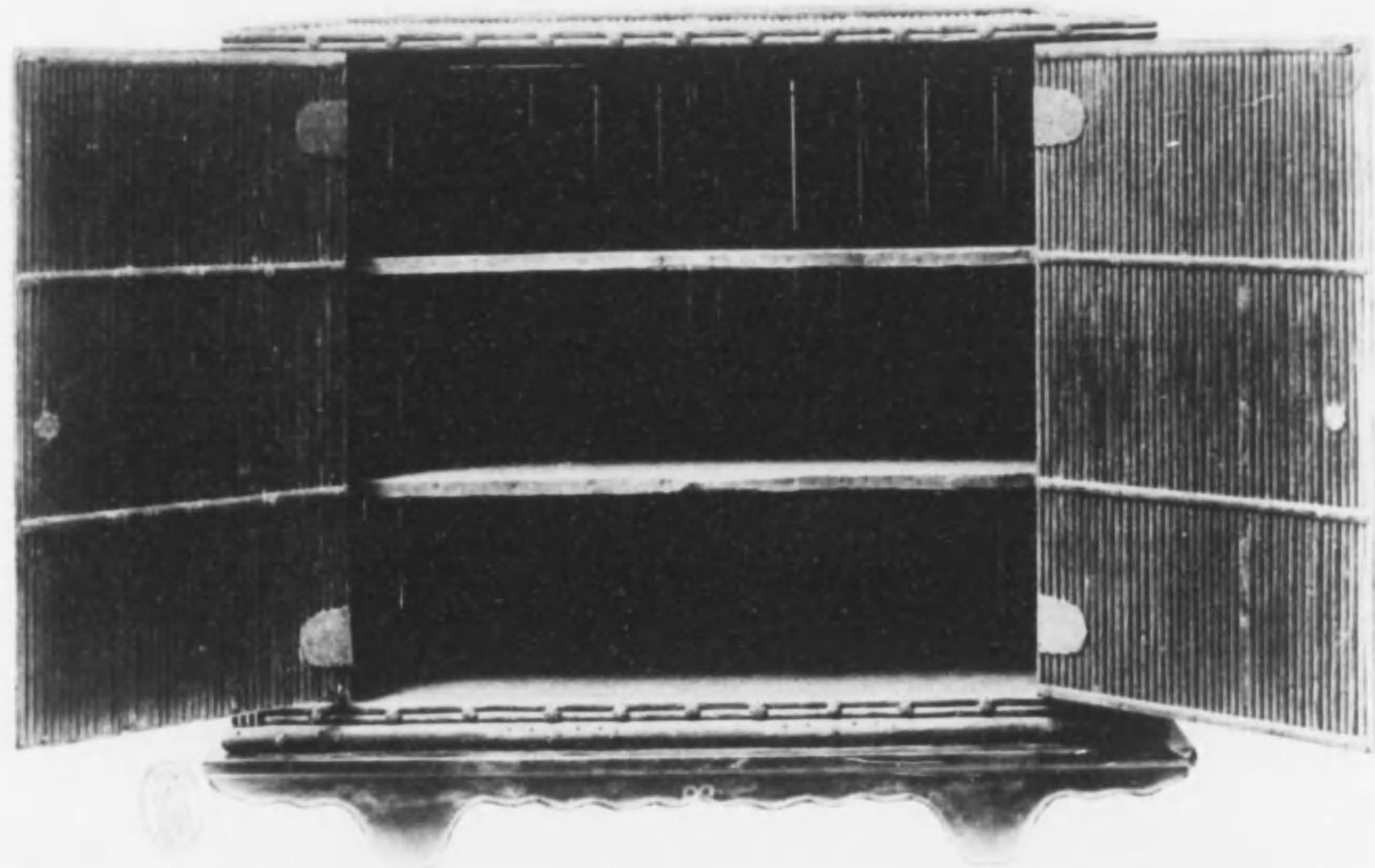
PL. 59

中国工艺美术史

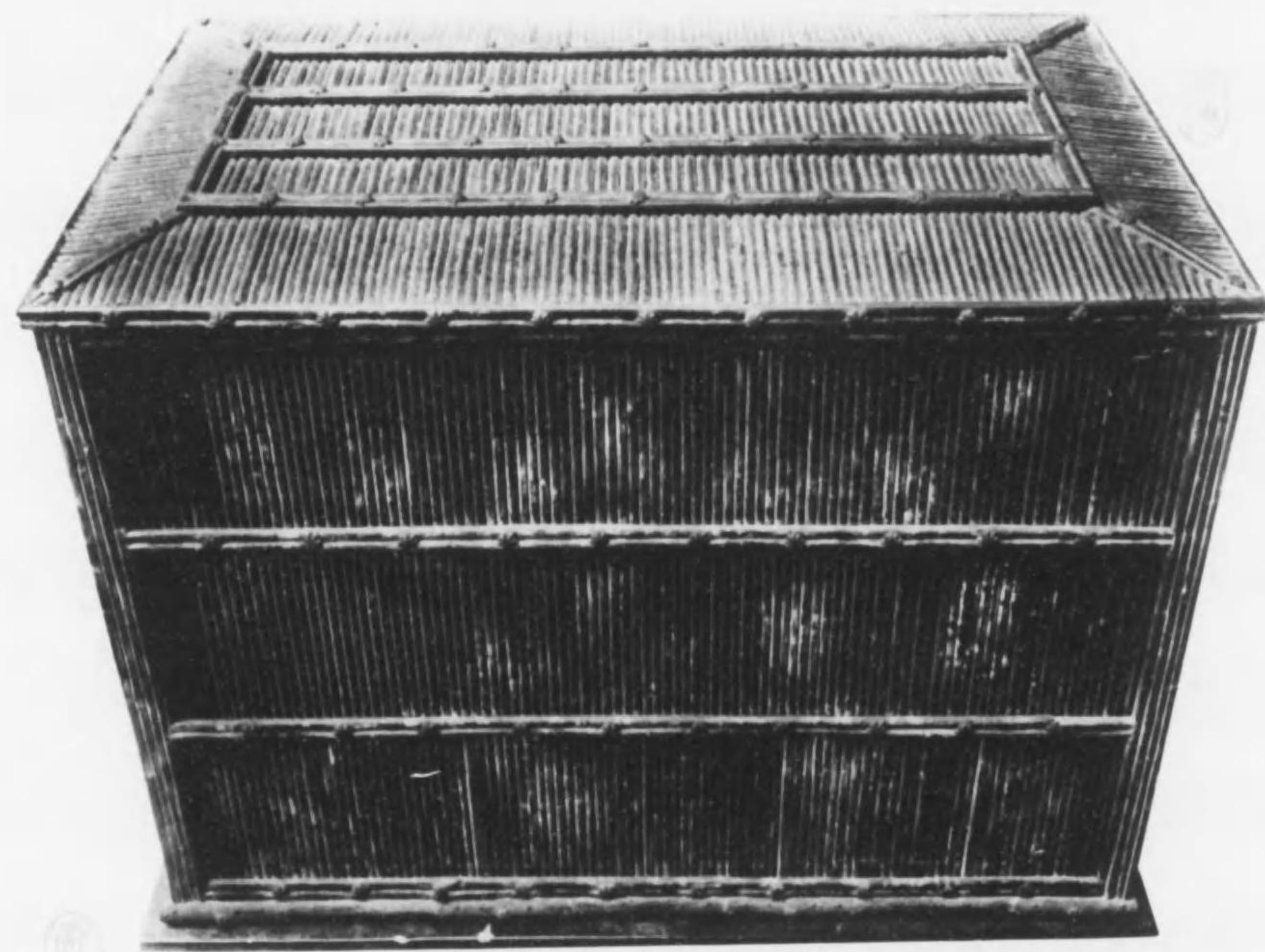








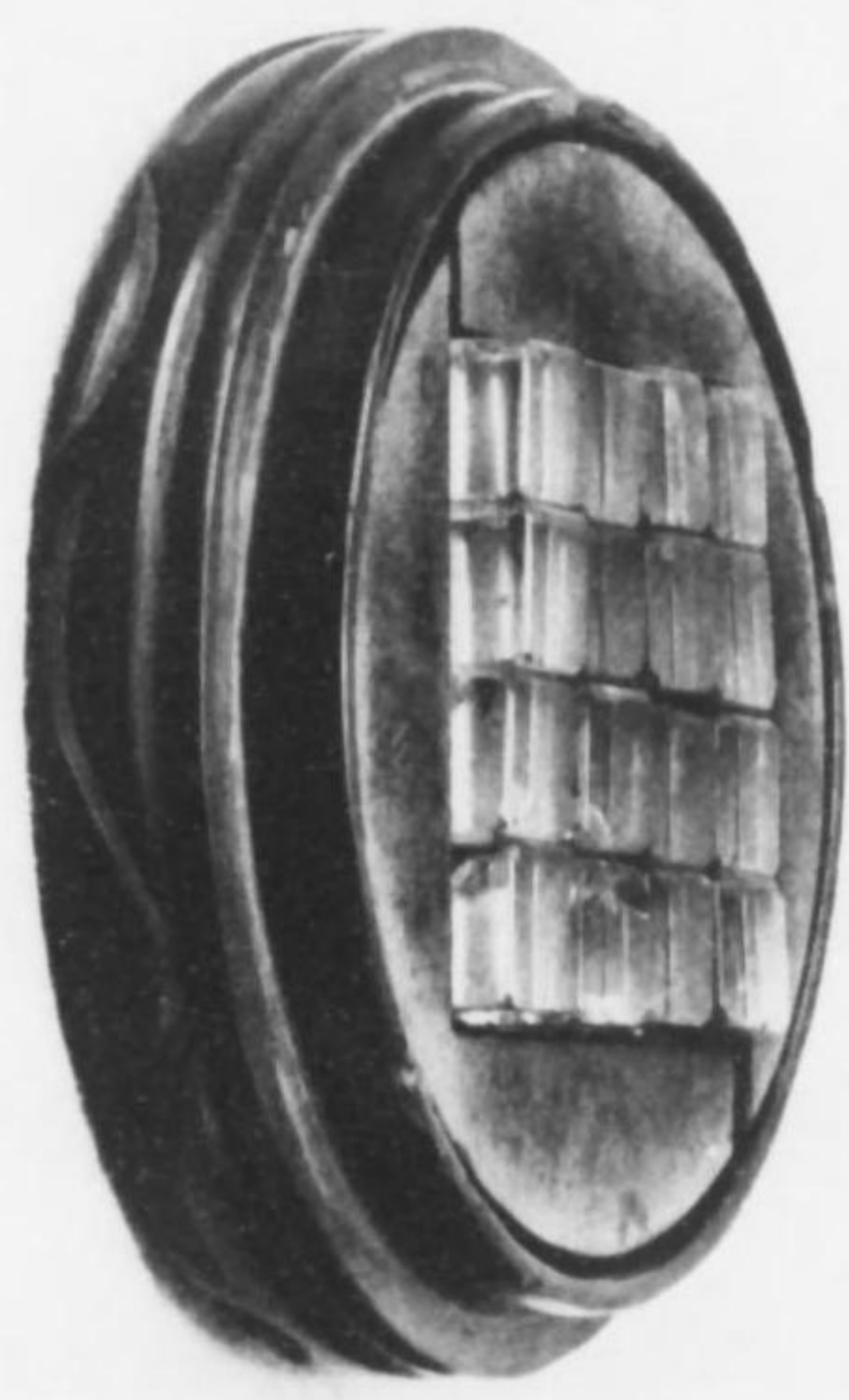
PL. 44



PL. 45

PL. 46

1873



1873



63



PL. 70



PL. 71



PL. 74



PL. 72

五 五 五 五



100

100

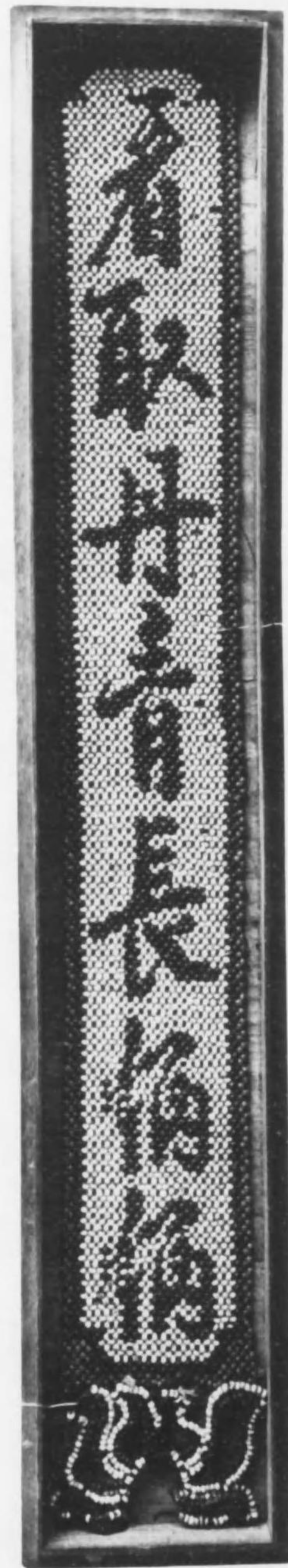
100



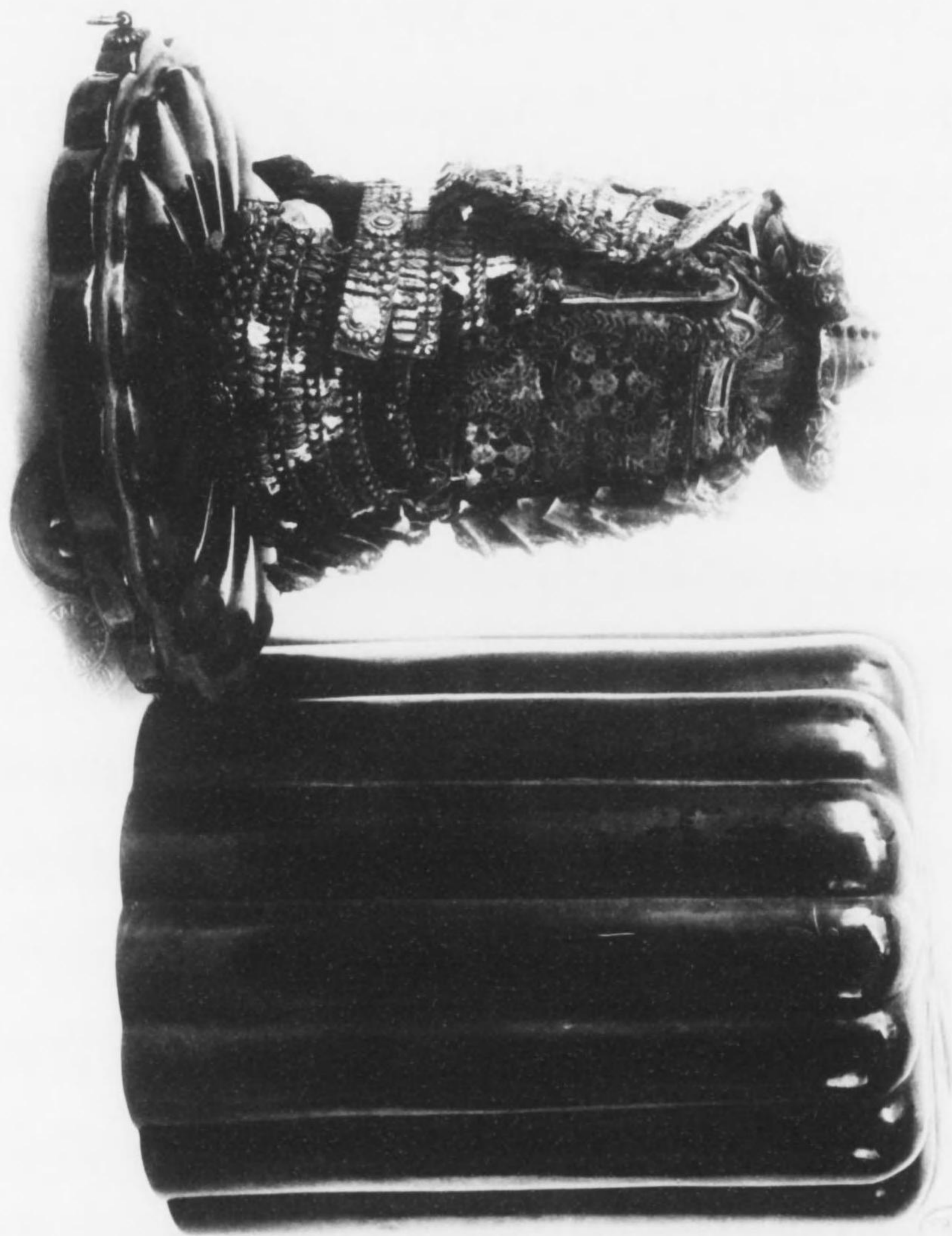


PL. 74

PL. 74



PL. 75



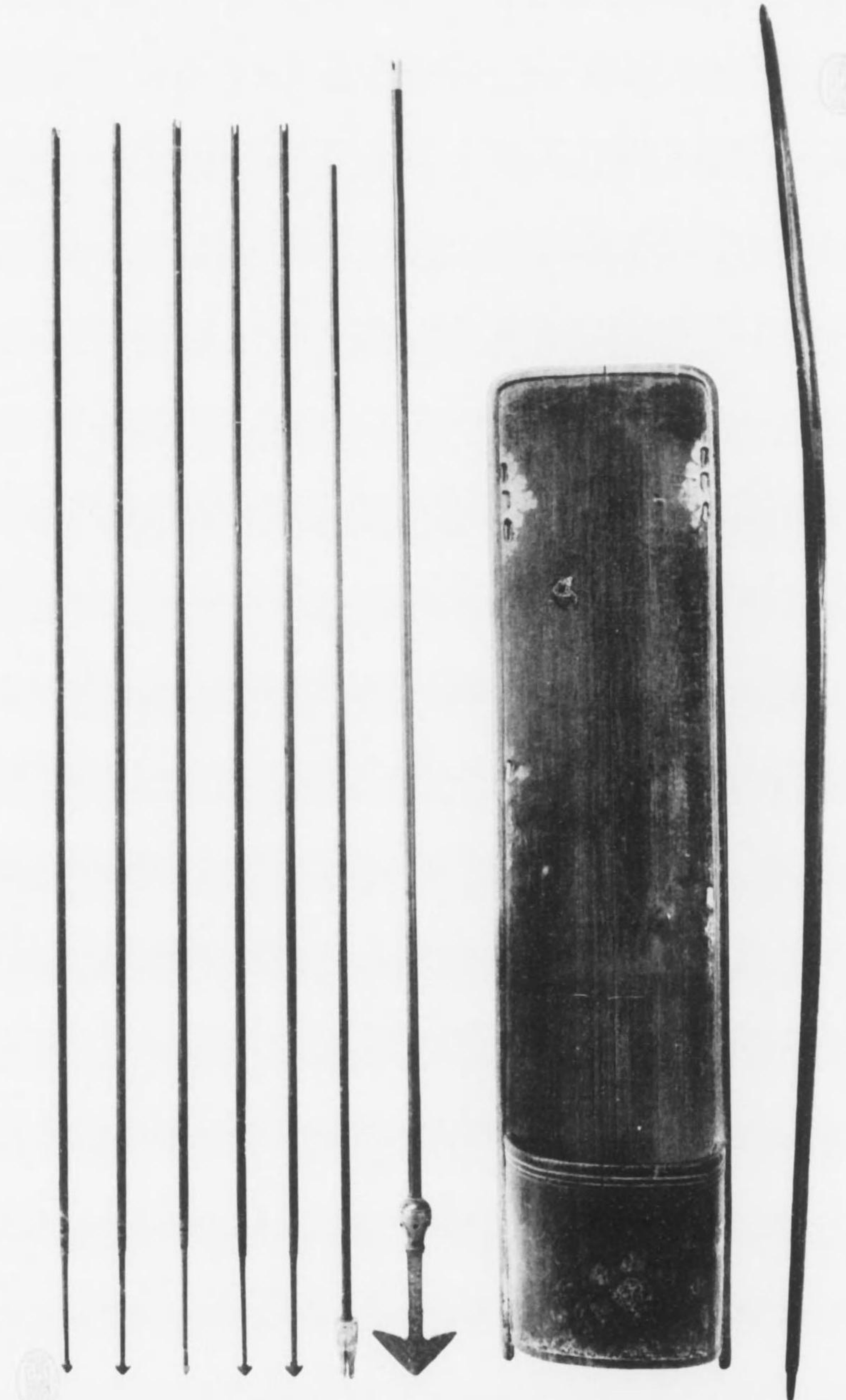
100-714



100-714



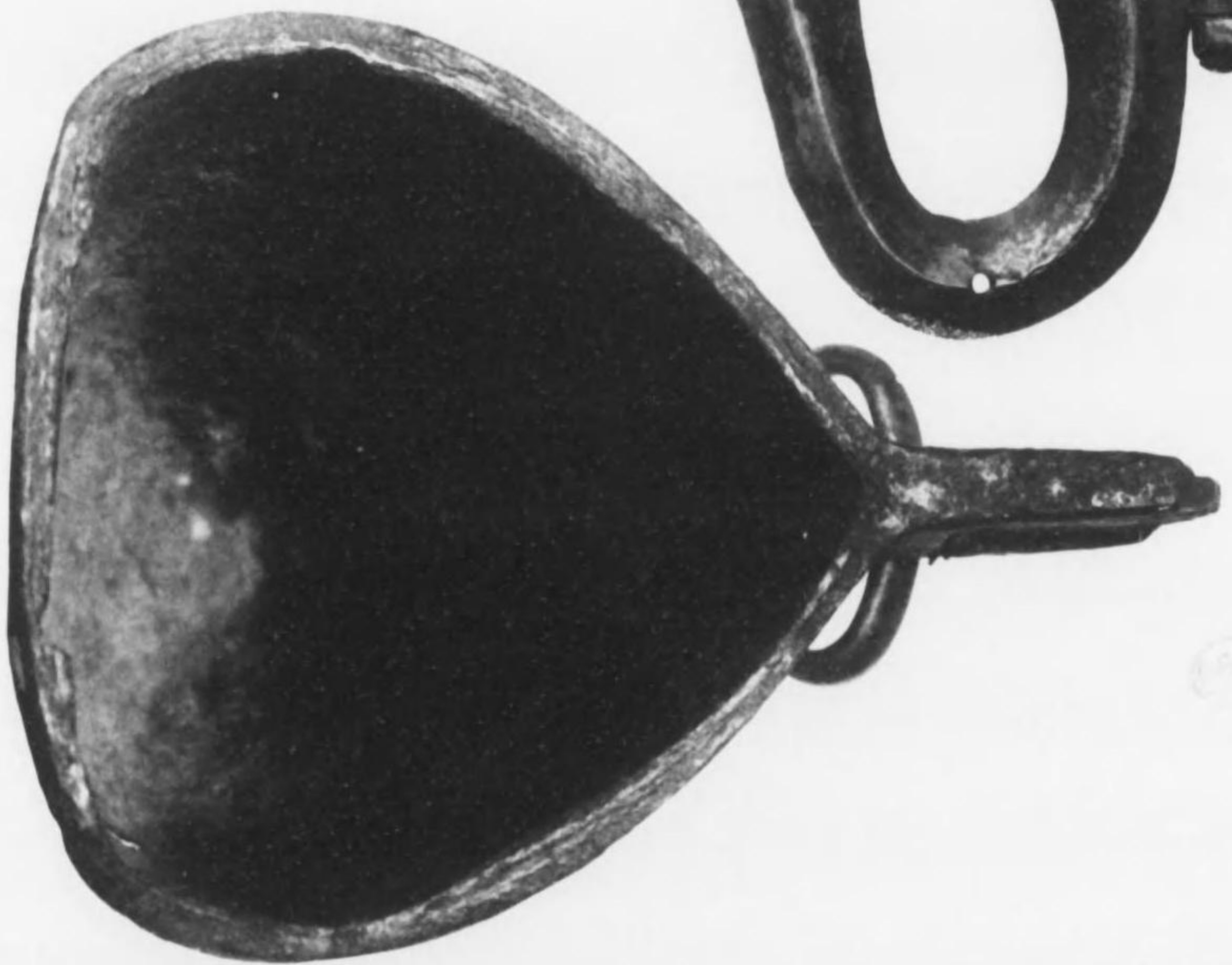
100-714



100

100 100 100 100 100 100 100

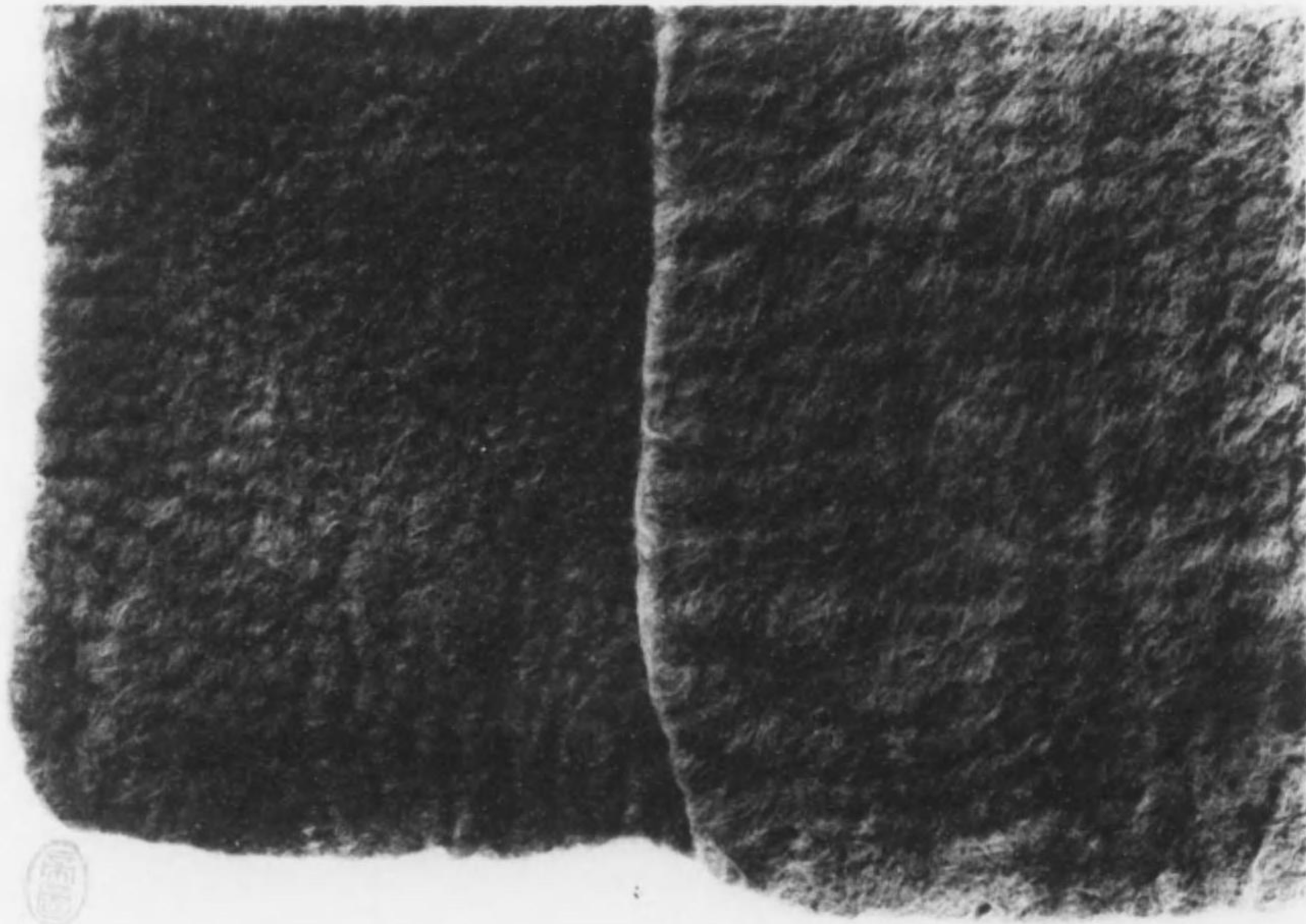
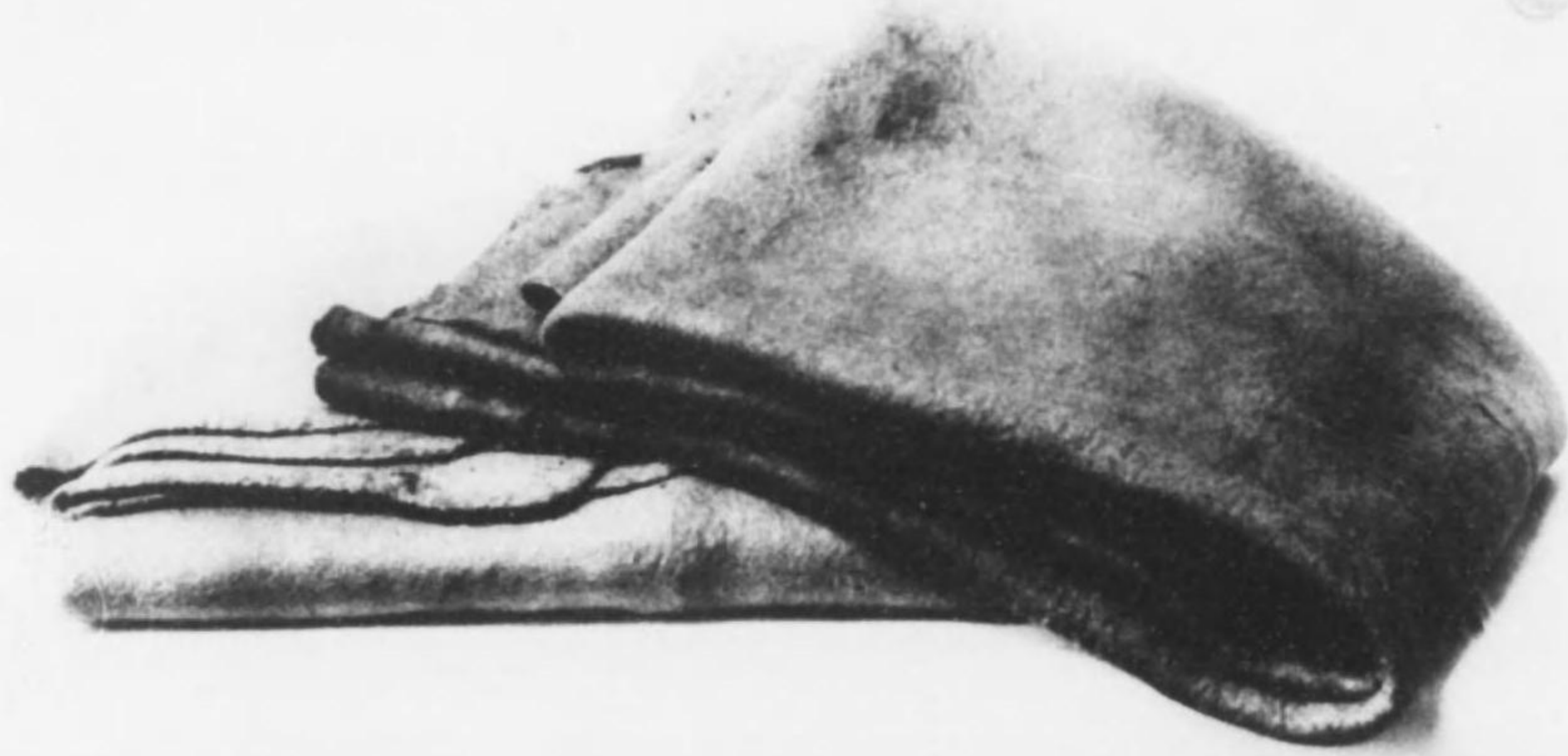
100



100 714

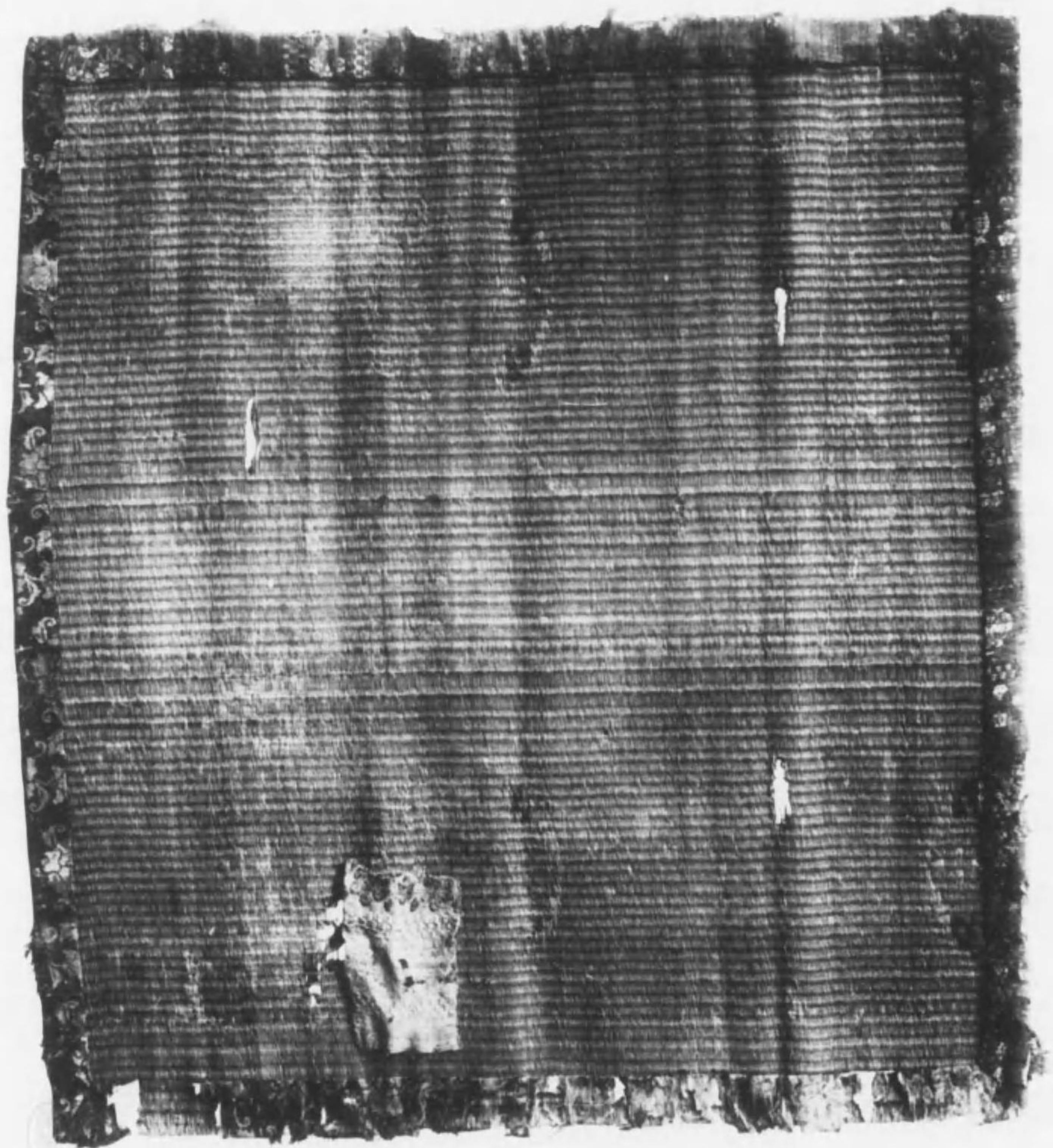
100 714

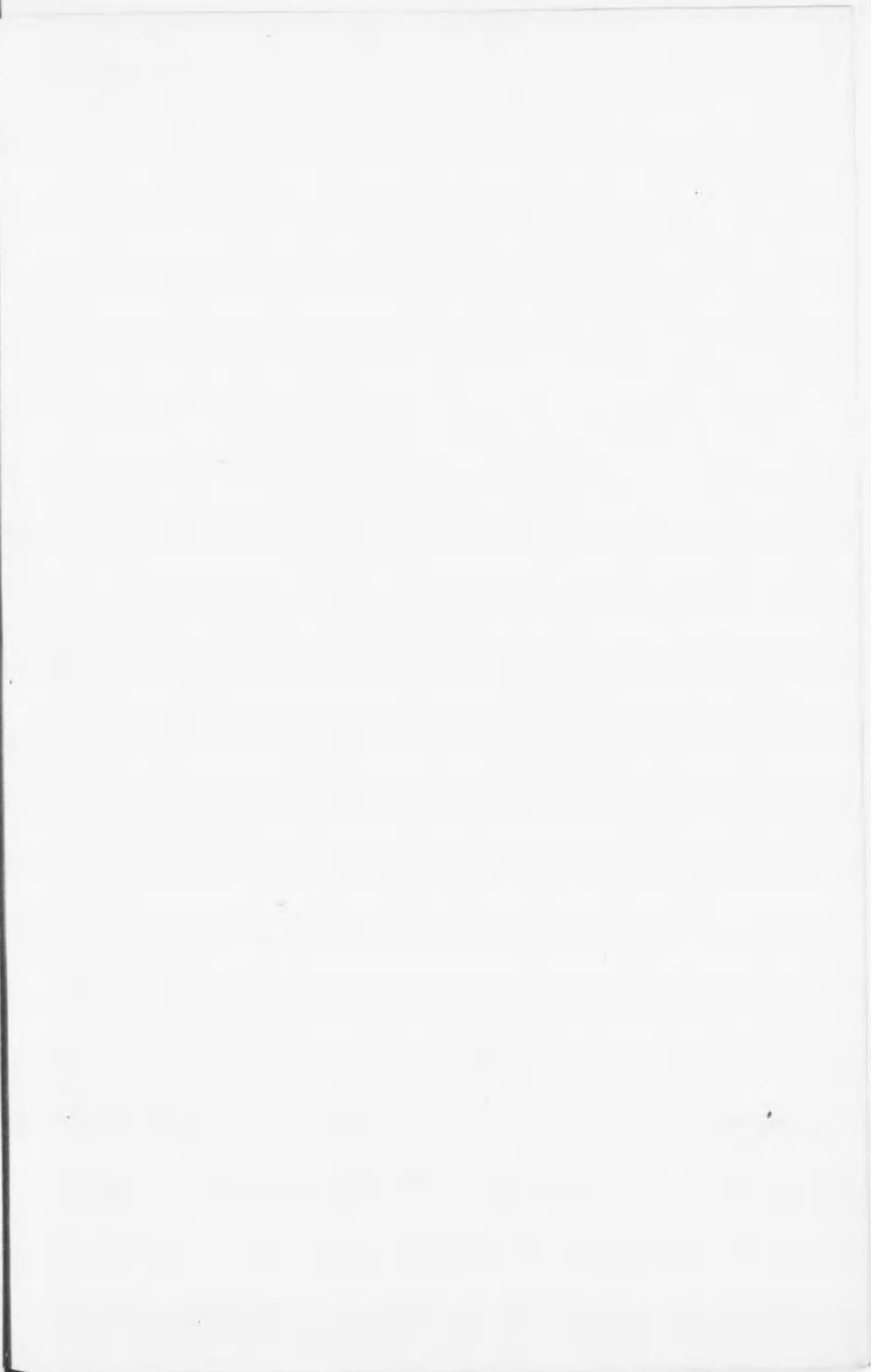
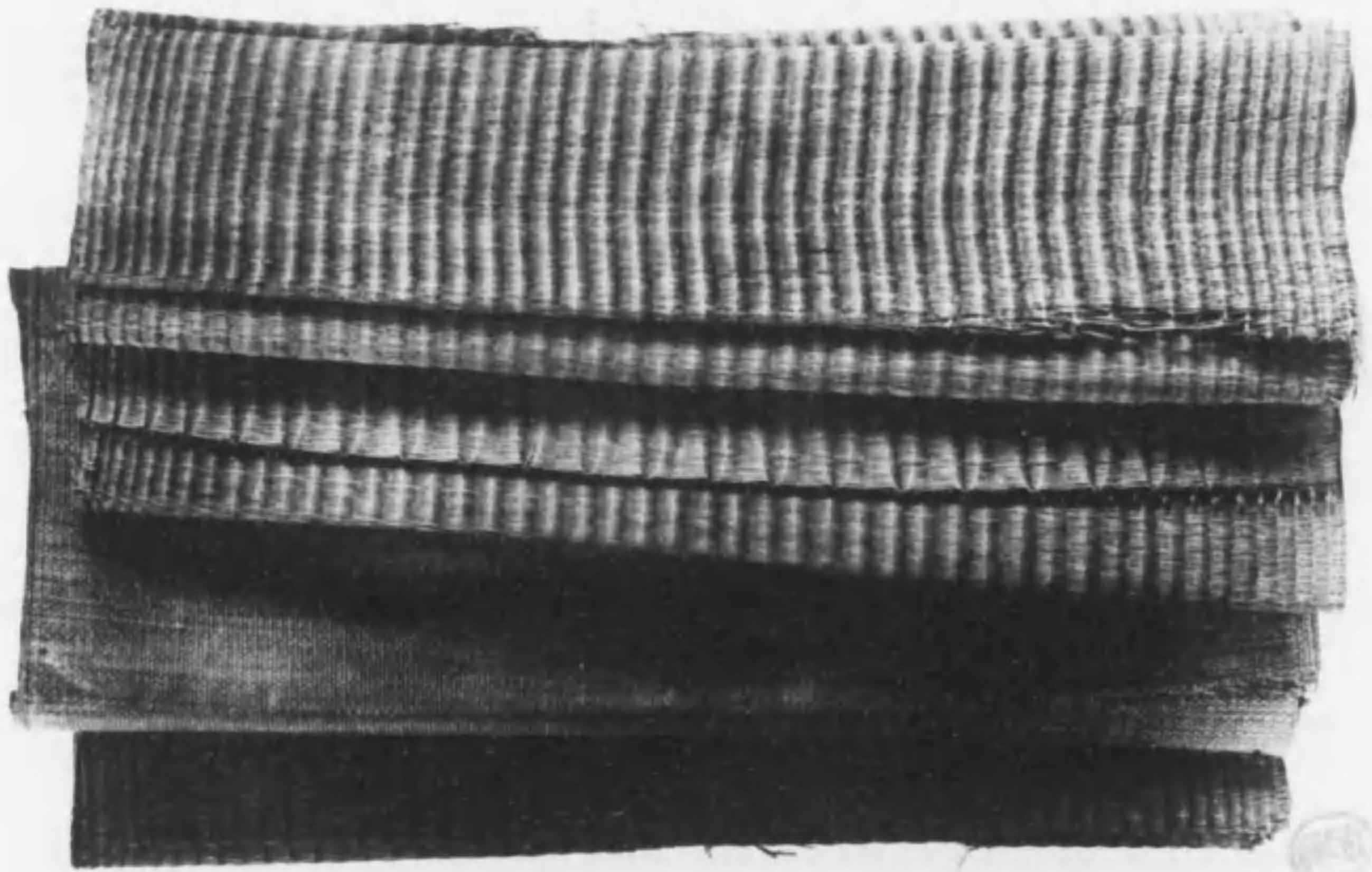
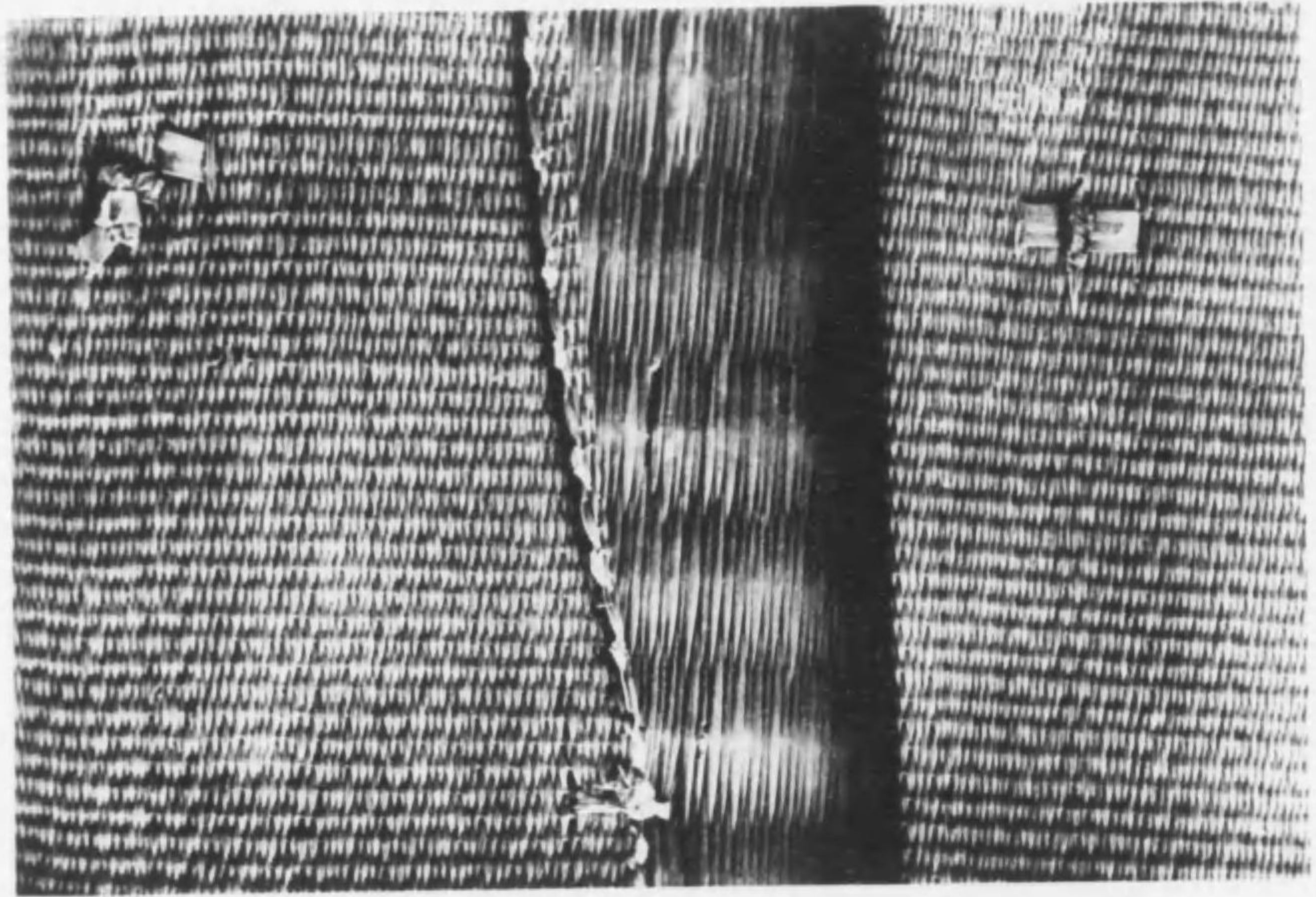


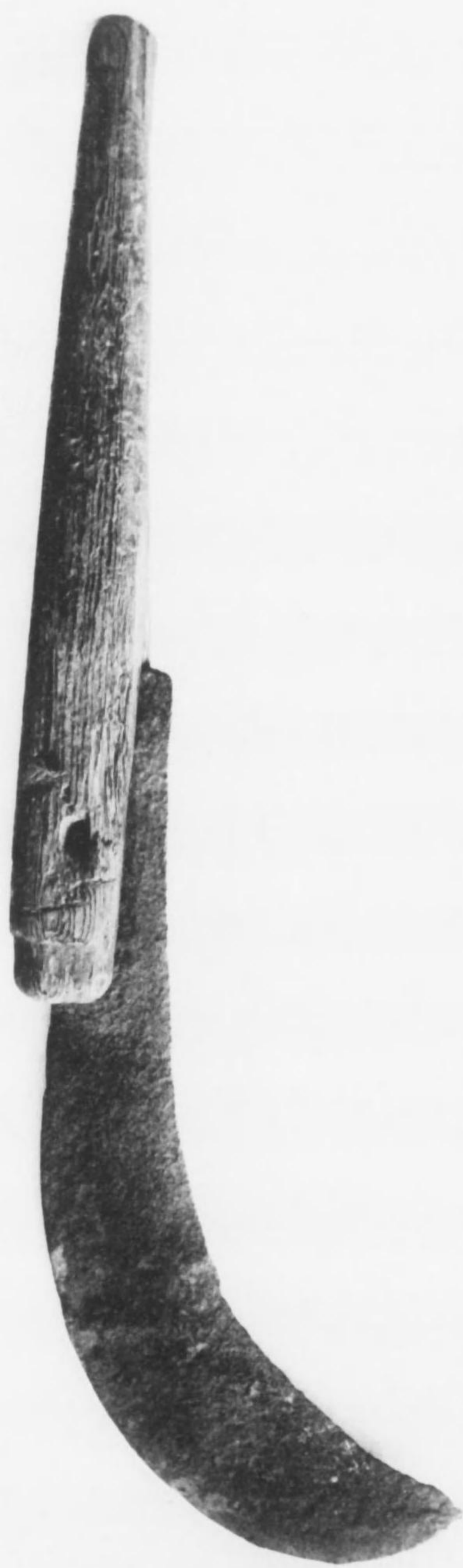


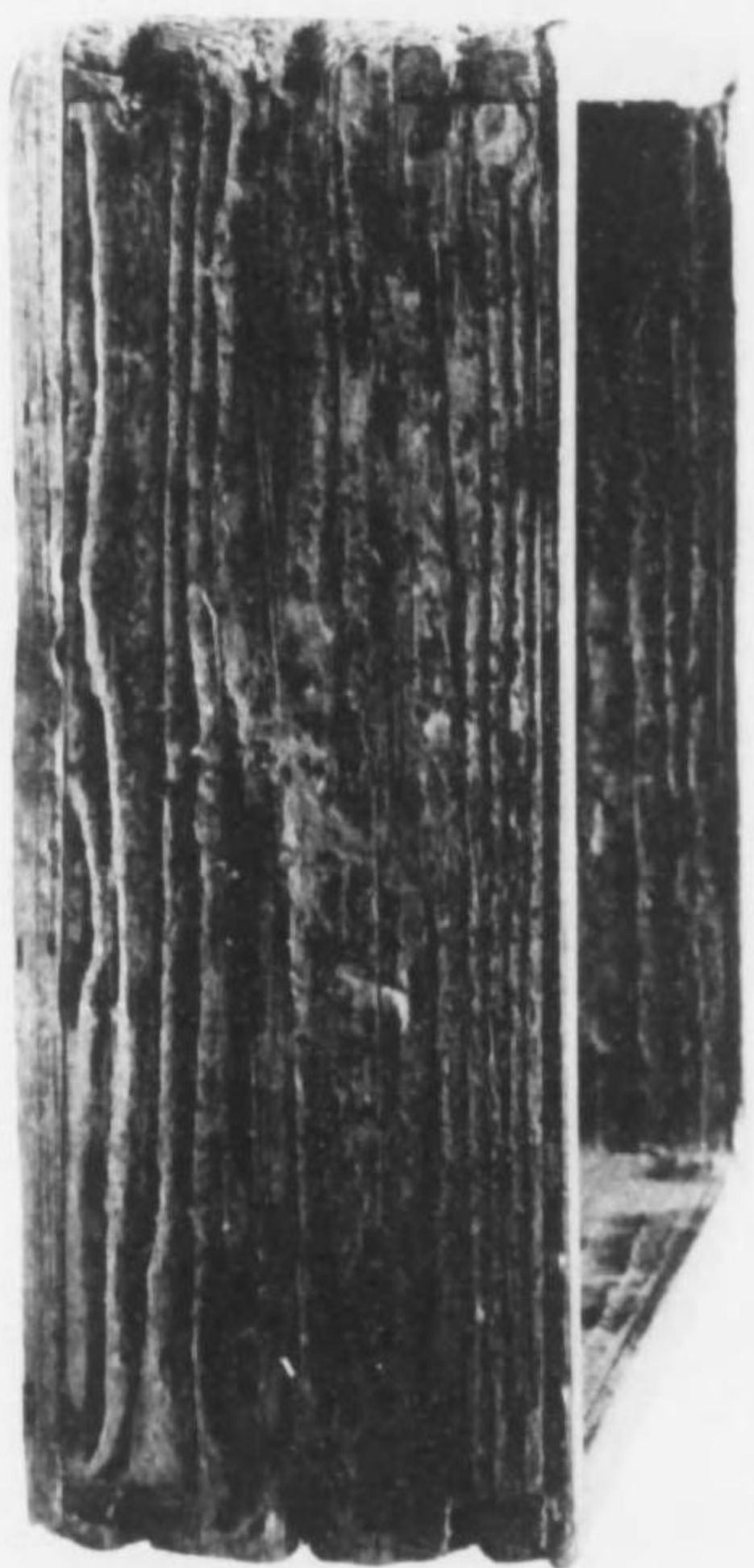
PL. 10

PL. 11









昭和九年五月四日印刷
昭和九年五月九日發行

南都十大寺大鏡第十二輯
法隆寺大鏡第十二冊

編輯者 東京市下谷區上野公園内
東京美術學校

不許複製
發行所 東京市本郷區金助町四十五番地
大塚 稔

印刷所 東京市本郷區金助町四十五番地
大塚 巧藝社

發行所

東京市本郷區金助町四十五番地
大塚 巧藝社

電話 水戸川三六〇八番
郵政東京二二七七二番



CATALOGUE
OF
ART TREASURES
OF
TEN GREAT TEMPLES OF NARA
VOLUME TWELVE
THE HORYUJI TEMPLE
PART XII

THE OTSUKA KOGEISHA
TOKYO
1934

ART TREASURES OF TEN GREAT TEMPLES OF NARA

VOLUME XII

THE HÖRYŪJI TEMPLE

PART XII

PLATES 1-33 *Gigaku* MASKS

Height, (largest one) 1 ft. 4½ in. (smallest one) 9 in.

It is well known that masks of *Gigaku* dance were as abundantly produced as those of *Bugaku* dance in the Nara epoch. The masks here illustrated apparently date from that time. Though some of their names are known from a certain document of the Tempyō era, we cannot identify all these masks, for the record has no description in detail. Naturally such masks have their own expression in a broad sense, yet at the same time they generally present more scope for imaginative treatment when compared with Buddhist images. The specimens before us also follow the rule. They each display some symbolic meaning and mystic sentiments of ancient times, because the carvers of these masks evidently took special care that they might not appear too realistic.

PLATE 34 *Genjōraku* MASK

Wooden and lacquered. Height, 1 ft.

The whole surface is lacquered red in the Negoro-nuri style, and the eyebrows and the reverse side black. Its teeth and eyes are plated with a gilt-bronze sheet. But its two horns and fangs are later restorations. On the back is inscribed the date of the seventh of July in the fourth year of Einin (1296).

PLATES 35-36 *Kakko* DRUM

Length, 10½ in. Diameter, 1 ft. 1½ in.

On the red-coloured ground of the frame the design of lions and tree-peonies is drawn and along either end of the frame runs a black border, against which is relieved of a series of beads a pattern done in gold-leaf consisting. From such a specimen we may

easily understand the ancient practice of preferring the red decoration of musical instruments in the *Tang* dynasty. The cords in keeping with the stone frame are as strong as a bowstring. There are many proofs of the fact that the *Gigaku* music of the *Tang* dynasty was in vogue in Japan. The existence of such a musical instrument as this leaves not a shadow of doubt about it. Moreover it is all the more valuable because nothing of the kind has been preserved even in China.

PLATE 37 FRAME OF *Kakko* DRUM

PLATES 38-39 DITTO

Wooden and coloured. Height, (smaller one) 1 ft. 3¾ in. (larger one) 1 ft. 5½ in.

The smaller one is made of *keyaki* (*zelkova*) wood and the larger of Japanese cedar (*cryptomeria*). Discoloured as they are, beautiful designs of *Hōsōge* flowers and clouds painted in graded-colours are still visible. They are thought to be works made about the time when the Tōin of the Hōryūji was rebuilt. The beautiful engraving on gilt metal-fittings tells the exquisite art of those days.

PLATE 40 FRAME OF *Kakko* DRUM

Lacquered on the ground of paulownia.
Height, 1 ft. ½ in. Diameter, 7¼ in.

The inscription written in India-ink on the hollows of either end of the frame tells how the original *kakko* drum in the temple became too old and for use in the Shōryōe ceremony in 1357 a certain artist was ordered to make this after a specimen belonging to the Yakushiji temple. The piece is remarkable for antique grace and the simple method of plain lacquer-

ing on the paulownia ground almost severe in effect. It seems too crude to be a work of about the Embun era (1356-1360), but this is for the reason given in the inscription.

PLATE 41 REST OF *Kakko* DRUM
Height, 9 $\frac{1}{2}$ in. Width, 10 in.

The upper surface is lacquered red, but the underside black. It has two slits on the upper surface in order to hold a *Kakko* drum in place.

PLATE 42 FRAME OF *Keirū* DRUM
Height, 8 $\frac{1}{2}$ in.

While nearly all ancient musical instruments were irrevocably lost, the existence of such an old specimen as this *Keirū* drum is really a wonder and endorses a well-known fact that all our great temples encouraged music and dance in olden times. The article now discloses the grain of wood, but originally it is evident that it had an ornamental design thereon. We cannot tell its exact date of production, but it was certainly not later than the Nara epoch.

PLATE 43 *Shakuhachi* (BAMBOO FLUTE)
Length, 1 ft. 5 $\frac{1}{2}$ in.

As the name *shakuhachi* is mentioned in certain documents of the Nara epoch, it must have been played in general in those days. The present specimen is the oldest extant bamboo flute of that time. In length it is about seventeen inches or eight *Tang* inches according to the shorter measure of the age. Hence it is generally called a shorter flute or *shakuhachi*.

PLATE 44 CHINESE *Koto* OF *K'aiyūan* ERA
Length, 3 ft. 7 in.

The seven-stringed *koto* is lacquered all black. According to the inscription written in India-ink on its frame, it was made at *Chinrong* in China in the second year of *K'aiyūan* (714), that is, during the reign of the Emperor *Hsüantsung* of the *Tang* dynasty. *Chinrong* being the present *Chengtu, Szechuan*, is in *Shu* province famous for the production of paulownia wood, which is the best material for *koto* frames. Though we cannot hear its sweet melody, the instrument remains an invaluable relic bearing the exact

date and coming from the centre of *Koto* manufacture in Old China.

PLATES 45, 46 BRIDGES FOR *Koto* & CASE

These *Koto*-string, props chestnut-coloured and decorated with a gold design, are the prototype of the bridge of the so-called *Hōryūji* pattern. They are kept in a case of *tsuishu* or engraved lacquer-work with a piece of red gold-brocade spread on the bottom.

PLATES 47-49 SUTRA-CASE
Height, 4 $\frac{1}{2}$ in.

The case is made of aloes-wood and veneered with a thin coating of bastard cedar, which is adorned with the so-called *kaibu* or maritime design in gold paint. On the edge of the case there remain two out of six clasps of ivory engraved with floral arabesques. Pearls and emerald gems inlaid on the edges of the case have mostly peeled off, but few of them remain here and there reminding us of the original splendour of the work.

PLATES 50-51 LACQUERED LEATHER CASE
Height, 2 $\frac{1}{2}$ in. Length, 1 ft. 1 in. Width, 1 ft.

The framework of the box is made of leather and then strengthened with a thick layer of lacquer. All over the surface this case is decorated with a floral pattern in gold paint. The graceful effect comes from the contrast of the gold design with the black of the lacquered ground. In fact the workmanship may justly be called the prototype of *makiye* or gold-lacquering in later times. The floral pattern we see here being a popular one in the Nara epoch is composed of a circular device in the centre, four surrounding twigs and other scrolls arranged in four corners, which bring all into a complete whole. Tendrils spreading down to the sides of the case as if to flank the main portion of the ornament lend themselves to the decorative effect of the piece. Unluckily it is not known what this case was used for.

PLATE 52 FRAGMENT OF CASE
Leather-work and lacquered.

This case is thought to be a work of the Nara

epoch. Broken as it is, it retains nearly perfectly its unique round pattern coloured in the *ungen* style. Such a design consisting of stamen-like shapes is very uncommon.

PLATES 53, 54 LID OF HORAISAN LACQUERED CASE

Height, 2 ft. Length, 1 ft. 7 $\frac{1}{2}$ in. Width, 1 ft. 4 $\frac{1}{2}$ in.

Only this lid remains out of the lacquered case. Gold dusts are scattered sparsely all over its black-lacquered ground, on which designs are lacquered in silver and gold. That of the outside is made of flying cranes with a spray of a pine-tree and that of the reverse is the scenery of the sacred mount *Hōraisan* resting upon the back of a tortoise. It is reasonable to regard this case as a work of the pre-Heike period or about the reign of the Emperor Toba, that is, about the time when the restoration of the *Hōryūji* temple was close at hand.

PLATES 55-56 CASKET WITH *Katawaguruma* DESIGN

Height, 4 in. Length, 1 ft. $\frac{5}{8}$ in. Width, 9 in.

The case is lacquered black and finished in the *nashiji* style. Tin-foils plated on the edges are almost entirely corroded with rust. The outside is decorated with a gold-lacquered design of waves and *katawaguruma* (or unfastened wheels). A gold-lacquered design on the inside of the cover represents twigs of the pine-tree and chrysanthemum etc. with flying birds among them. It is recorded that this is an article donated to the temple by Yoritomo Minamoto, but its workmanship shows that it is likely to be a production of the Ashikaga period.

PLATE 57 DESK WITH PLOVER DESIGN

Height, 4 in. Length, 1 ft. 9 in. Depth, 1 ft. $\frac{1}{2}$ in.

The black-lacquered ground is finished in the *hiramakiye* style and gilt metal-fittings are carved in hair-lines with a design of waves and plovers. It is said that this desk was presented to the temple by the Ashikaga Shōgun Yoshimasa. The design of plovers seems to have originated in the decoration of the reverse side of a mirror produced in the Kamakura epoch, but this work is thought to be the earliest instance

of the use of a gold-lacquered plover design. Considering extant art works produced in the Kamakura epoch, we can say that the design of the pine-tree and cranes flying with a pine twig was preferred to other decorative motifs in chisel-works or gold-lacquered pieces of that time, but the tasteful design of flying plovers taking the fancy of people in general came into a great vogue and took its place. This desk may also be thought a production of those days. Though we have no positive proof to show that it was Yoshimasa's present as tradition would have it, we cannot help considering it as a work of his day in view of its rather too delicate technique and thickly powdered gold dusts.

PLATES 58-62 CHEST WITH INLAID PHOENIX DESIGN

Height, 1 ft. 5 $\frac{1}{2}$ in. Length, 3 ft. $\frac{1}{2}$ in. Width, 2 ft. $\frac{1}{2}$ in.

The whole ground inside and out is lacquered black and sparsely scattered with gold dusts, which glimmer faintly here and there. The surface of the chest and its legs is enriched with round mother-of-pearl, patterns the inside of which is finished in the *nashiji* lacquering. The same method of decoration is to be seen on the legs with moulded edges. The inlay-work of mother-of-pearls is full of vigour and beauty. It is rare to see such a bold design arranging large patterns all over the surface; especially noticeable is the novel way of putting a round pattern over the edge from front to side. Mother-of-pearls were in common use for round patterns or floral arabesques since the Fujiwara period, sometimes they served to produce a pictorial effect in conjunction with gold-lacquering. About the Kamakura epoch the technique of the use of mother-of-pearls reached its full maturity; for instance in those days they successfully produced pictorial designs by their means alone. The present specimen does not show the technical skill at its best; however, we may well praise it as a masterpiece of that sort of work in the Kamakura epoch for the harmony of its skilful designing and beautiful execution. The ground of the reverse side of the cover is lacquered in the same style as the outside and is

sparsely scattered with gold dusts, gold-lacquered floral arabesques adorning the middle and four corners. Flowers are lacquered in silver or sometimes in gold and vines altogether in gold. There are blank spots on flower-petals in the design; may be the artist intended to produce the effect of inlay-work of mother-of-pearls by means of gold-lacquering alone. It is very tasteful. Moreover, in the treatment of floral arabesques too we can perceive the characteristic features of the Kamakura epoch.

PLATES 63-66 MOSAIC WOODEN BOX

Height, 6 $\frac{1}{2}$ in. Length & Width, 9 $\frac{1}{2}$ in. each.

This is one of the most remarkable marquetry works imported into Japan in ancient times. Notwithstanding that the wire-netting prevents us from examining all the materials, we can see how thin pieces of rare wood, coloured ivory or horn are arranged so as to produce a graceful effect in colouring, form and design to the best advantage. Two dancing children, a boy holding a hawk in hand, another mounted on a lion and another with a bird like a phoenix, these four figure designs are seen one on each side. The corners of the sides of the cover have a round design bordered with a bead pattern. Considering all these points the box is surely of Chinese manufacture revealing certain artistic elements from Central Asia. It is not only among important materials for the study of the relations between the Chinese and Japanese civilizations, but also the only extant valuable article that tells the historical connections between those of China and Central Asia.

PLATES 67-69 BAMBOO-WORK *Zushi* (SMALL SHRINE)

Height, 1 ft. 10 in. Length, 2 ft. 5 in.

Width, ft. 13 $\frac{1}{2}$ in.

A document of the temple in 761 records this small shrine made of bamboo. Almost all the supports at corners and the pedestal are to be regarded as the restoration in some later times and all metal-fittings on the pedestal and most chrysanthemum-shaped rivets are evidently much mended so that

the article has become slightly irregular in size. It has a board for the top, bottom and two shelves respectively and a large number of slender bamboo sticks are closely arranged so as to connect them into a whole. On the outside and corresponding to the edge of each board is fixed a horizontal bamboo cleat by means of chrysanthemum-shaped rivets. Then the framework is supported with four posts upon a pedestal and covered with a bamboo-roof and hinged with door-leaves. Slender and weak as its appearance is, it has remained intact through many ages. It is needless to say that an extraordinary skill is needed to construct such a work. As for the chief material bamboo, it is what is called *hanchiku* (or bamboo with spotted surface) in an old record, but no spot is visible now that it has become too old. At any rate, they are of a special kind of bamboo not to be found in Japan. All metal-fittings are of iron, except for the upper part of open-work door hinges, which consist of a copper surface, perforated iron disc in the middle and an iron washer underneath. It is curious to see that so many iron fittings are used here; whereas, in the Asuka or even later in the Nara epoch, gilt-bronze fittings were commonly used for a *zushi* shrine. The pedestal with cloud-shaped legs, which looks like a flat table or reading-desk, is a later supplement made for the convenience of the preservation and handling of the *zushi*. It goes without saying that this work was produced by a most skilful *Tang* artist, but its size is too small to reveal its artistic character clearly. Be that as it may, considering the shape of hinges on its door-leaves or its naive and quaint execution of the open-work fittings, the piece is surely among art works produced before the highest artistic development in the *Tang* dynasty. Probably this is an imported article from China.

PLATE 70 "ISHINATORITAMA" CRYSTALS
Life Size.

Crystal cubes of the name "Ishinatoritama."

PLATES 71-74 GOURD-WORK WITH EIGHT RETAINERS' PORTRAITS

Height, 5 ft. $\frac{1}{2}$ in. Width, 4 ft. $\frac{1}{2}$ in.

On the middle of the cover some inlaid letters arranged in square are visible which are adorned with arabesques and patterns. The materials used for the inlay and the manner of design remind us of that style which was in fashion during the Nara epoch, hence it may be said that this work originates in *T'ang* dynasty. Around the body the figures of eight illustrious retainers in China are represented. The account of use of gourd occurs *passim* in old literature in China. Probably the present work was made about the earlier times of *T'ang* dynasty taking consideration of the common way of production of those days. In general, the gourd-work like this was produced in the following way, that is, to begin with, a growing gourd is enveloped and pressed with a cast which was preliminary engraved with some decided design, and then, it is cut off from the vine in time and dried up. The shape is very curious.

PLATE 75 JAR

Height, 10 ft. $\frac{1}{2}$ in.

The whole appearance resembles a celadon porcelain and the surface from the bottom to the body is thickly enameled. It is unknown what it was originally used for. It may be an imported article from Korea in some old times.

PLATE 76 *Ban-e* PRINTING-BLOCK

In the true sense of the word *ban-e* means a decorative round pattern composed of circling figures of animals and clouds. We consent that such a pattern as this was generally printed on clothes in black ink. Nowadays the designed clothes printed by means of a printing-block like this go out of fashion, hence the present printing-block of *ban-e* pattern has much worth to think of. Some letters are carved on both sides. Probably the reverse side too was used in case of need.

PLATE 77 GLASS BEADS ORNAMENT OF PALANQUIN

Height, 2 ft.

PLATE 78 CANDLESTAND

Height, 2 ft. 5 $\frac{1}{2}$ in.

Both are recorded as the articles for the use of the retired Emperor (Hō-ō) Shirakawa. The ornament of palanquin is a fine patch-work of *fukidama* or popularly called *nankindama* (glass beads). On the ground composed of whited beads the letters of black beads are represented and the edges are decorated with red, blue and white beads. The style of letters is likely the Sung style and moreover, the beads are undoubtedly the imported materials from China. Hence, we may rely on the record of the document of the temple and at the same time the specimen may be regarded as a treasurable relic of those days.

As to the candlestand, both the post and pedestal are lacquered black and on the reflect-plate there is a picture painted in colours on chalked ground. Such candlestand does not belong to a rare kind of work, but we are sure that the so-called Hōryūji-style candlestand originates in this specimen.

PLATE 79 SMALL ARMOUR

Height, 7 in.

Small and toy-like as it is, the work is executed after a real armour. The helmet is of wood and coloured. It reminds us of the features of a warrior under arms in the Gempei times. The case is of paper and lacquered in *negoro-nuri* style. Its look of age is worth appreciating.

PLATES 80-81 SHICHISEIKEN SWORD

Length, 2 ft. 3 $\frac{1}{2}$ in.

The sword illustrated in Plate 80 is named *Shichiseiken* and was originally held by the right hand of the image of Jikokuten installed in the main Hall (Kondō) of the Hōryūji temple. The other, illustrated in Plate 81, is the sword which was found in the back of the right hand of the image of Zōchōten in the same place.

The latter is remained as it sheathed in because of rust. The hilt of each sword is rapped up with copper wires and lacquered over. The metal fittings decorating the hilt and pommel are of gilt bronze

and vine patterns in hair lines are visible. The sheathes are lacquered black, but the sheath of the *shichiseiken* sword appears somehow reddish, maybe, it was undercoated with coloured lacquer. Comparing the *shichiseiken* with the other, we find not only the difference of lacquering way or degree of damages but also of the length of the sheath between them, that is, the former measures 25.4 inches in length and the latter 28.3 inches. The name *shichiseiken* are derived from its design composed of clouds, mountain, the moon and seven stars in hair lines on the surface of sword, and the design was originally put in gilt-gold, but the gilt-gold was almost worn off so that we can scarcely find out the traces. Naive as their forms appear, they are very tasteful. They are, indeed, the treasureable relics for our research on the types of sword in ancient times, because as to the date of the production we are sure about the reign of the Emperor Kōtoku (645-654) when the above-mentioned images were made.

PLATE 82 BOW, QUIVER AND ARROWS

The bow is lacquered in colour on black undercoating and a long and thin carved line is seen on its back. Tradition says that it was used by Prince Shōtoku.

The arrow with turnip-shaped head is called *kaburaya* and here illustrated one has a head of buffalo's horn which six holes are cut through and its arrow-edge is of ivory. The one without head is so contrived as to replace any arrow-head at will. It is sure that such kind of arrow was generally used in the ancient times of Japan, because many arrows of the same kind are excavated even now. The next illustrated ones are named *risen*, and each arrow head is 3.6 inches in length. All the arrow-feathers of eagle run short now.

The quiver is made of *hinoki* (Japan cypress) and adorned with round floral patterns in *mitsudasō* paint and its bottom also is decorated with small floral patterns.

PLATE 83 STIRRUP
Iron-work.

The shape is very unique and rendered like the shape of half-cut shoe providing to real use. There is no other relic which could remind us of the prince Shōtoku's time.

PLATE 84 HALF-SHOES OF PRINCE SHŌTOKU
Length, 94 in.

As the accessory the shoes were formerly placed in front of the image of Prince Shōtoku the principal image of the Shōryōin Hall. They are made of wood and lacquered black. The shape may be the imitation from the shape of shoes painted in the portrait of the prince which belongs now to the Imperial possession.

PLATES 85-86 CARPET

The one is reddish and the other yellow. Though their history is not exactly known, they may be of the Tempyō era (729-748).

PLATE 87 RYŪNOHIGE MAT

This mat is woven with Japanese snake's-beards (*ophiopogon japonicus*) and mats of the same materials are widely produced all over Bingo province even now. There is no difference between the old and the new. Surely the mat of this kind was regarded as the best for all. Here illustrated one is margined with dyed cloth and it seems the article was submitted to the use for a person of high rank.

PLATES 88-89 MATS

There are no records concerning to these articles, but they were made in as much date as the mat above-mentioned.

PLATE 90 TOOL

PLATE 91 DITTO

The one is a saw and the other is likely an tool used for slicing wood off. We cannot know when they were manufactured.

PLATE 92 MEASURES

The large one has no inscription, but referring to the small measures, there are the engraved letters of date such as the six year of Bummei (1464), the third year of Chōroku (3459) or the second year of Kōsei (1456).





E708
N48
(12)

終

